

群馬県出土の土偶

——その変遷と地域的様相——

藤 巻 幸 男・石 坂 茂

1 は じ め に

近年における縄文時代の土偶研究は、数多くの研究論文の発表に象徴されるように、従来にも増して活況を呈してきている。そして、これらの論考を通じて、これまで不明瞭であった各地域の土偶の出土状況の把握や形式・型式の抽出、その時間的位置や変遷過程および各地域間を横断しての系統関係の把握等が試みられ、その実態もかなり鮮明になってきていると言えよう。こうした研究動向の背景の一つには、「土偶とその情報」研究会による全国的な土偶情報のデータベース化と、それに付随したシンポジウム等の研究活動があり、これらが少なからず寄与しているものと思われる。

一方、群馬県内では、板倉遺跡の遮光器系土偶や郷原遺跡のハート形土偶などの学史的に著名な土偶が早くより知られていたが、それ以外には量的にまとまって出土する事例に乏しいことや、個体数量そのものが僅少なこともあり、これまでに外山和夫氏⁽¹⁾や能登健氏⁽²⁾によりそれら土偶の幾つかが論考の俎上に乗せられたに過ぎない。しかし、最近では後・晩期の遺跡を中心にかなり多くの出土事例が報告されるようになり、県内における土偶の様相もある程度見通すことが可能な状況となってきている。現在筆者らは、これらの土偶について集成作業を行っている所であるが、その全体的な様相はこれまでの各論考により明らかにされてきたことと大筋において合致しているものの、他地域とは異なった土偶の存在も認められる。各時期を通観するには資料的に充分とは言えないが、その中から特徴的なものを抽出し、県内の土偶の変遷過程やその地域的様相について考えてみたいと思う。

2 土偶の分布と出土状況

群馬県内では、現在のところ80遺跡から507点の土偶の出土が確認されている⁽³⁾。この内、時期の判別できるものの内訳は、前期が9遺跡から15点、中期が6遺跡から11点、後期が51遺跡から236点、晩期が24遺跡から136点である。後・晩期が主体となっている点は関東地方の一般的傾向と符合しているが、前期が中期をかなり上回る傾向にあることは注目される。県内での土偶の初現期は、現在のところ前期後半の諸磯b式期であり、8遺跡から13点とその出土例も多い。続く諸磯c式期は1遺跡2例とその数を減らし、その後の前期末から中期中葉までの間は出土例が見られない。そして、中期中葉から後葉にかけて再び土偶は散見されるようになるが、いずれも他地域の形式が断片的に出土しているに過ぎず、中期における当地域は土偶を使用しての祭祀行為が低調であったと考えられる。土偶の使用が本格的に再開されるのは後期に入ってからである。後期



図1 群馬県の土偶出土遺跡の分布

前半ではハート形・筒形など複数の形式が併存し、1遺跡で複数の形式を保有する例は10遺跡に認められる。そして、山形土偶が出現する後期後半期には土偶保有量のピークを迎え、山形土偶だけでも29遺跡から126点が検出されている。1遺跡で多量の土偶が検出されるのも当該期以降であり、多量保有する遺跡は晩期まで継続するものが多い。

ところで、土偶の出現期にあたる前期後半は、県内で遺跡数が急増する時期にあたっており、また集中的居住による大規模(長期継続的)集落が出現する時期でもある。しかも、土偶とともに縄文呪術の双璧をなす石棒も、県内ではこの時期に出現している。これらの事実は、土偶使用の契機を考える上で、一つの材料となるであろう。しかし、前期後半の住居が98軒確認された昭和

表1 土偶出土遺跡の一覧

番号	遺 跡 名	総数	前期	中 期			後 期					晩 期					図 番 号	備 考 (土偶出土状況等)	文 献	
				阿	玉	勝	板	加	E	筒 形	ハート	板 状	山 形	木 瓦	その他	山形系				木 瓦
1	北浦(仮)	1																1		2
2	岩下(仮)	1											1							2
3	唐堀	1																1		36
4	郷原	1						1										31		9・13・16・30
5	清水	4									2			1				1	64・101・143	35・58
6	岩本天台	1						1												福田義治氏のご教示。
7	奥山原	1						1												福田義治氏のご教示。
8	壺谷	2						2										18		3・13・25・34
9	押出	3																3		後期配石出土例3。
10	茅野	16									10		6							73
11	下新井	10								1	4			2				3	49・70・84・111・133	44・57
12	行田Ⅱ ▲	4						1	3											後期住居出土例6。
13	下宿東	1	1																	出土総点数不明。
14	天神原	46	1						3		30		3	1	1	1	2	4	5・32・37・60・65・72・76・77・80・83・87・88・93・104・130	18・33・84
15	中野谷松原▲	4	4																	後・晩期配石出土例2。
16	白川(仮)	1																1		大工原豊氏のご教示。総数は4点以上。
17	八幡山	1	1															4		23
18	大平台	6							3				3					19・33・36	中期住居例2。	30・33
19	下佐野	1				1												15		74
20	本宿(仮)	1																1	118	70
21	大牛中原	1						1												30・33
22	増光寺 ▲	5				4					1									79
23	下鎌田 ▲	1				1														新井仁・小野和之氏のご教示。
24	寺山	1						1												88
25	内匠上ノ宿	4						3	1									29		87
26	白倉下原	1									1							20・21・30・38	後期土坑出土例1。	8・30・33・81
27	吉田(仮)	1									1									木村收氏のご教示。
28	宿(仮)	1									1									33
29	黒熊第5	2	2																	22
30	猿田(仮)	1									1							7・8	前期住居出土例1。	38・65
31	沖Ⅱ	8																59		30・33
32	滝川(仮)	1																8	140・144・145	晩期土坑出土例1。有髷土偶2。
33	谷地	75	1							2	33	3	13	4	4		1	14	9・52～55・74・75・78・79・81・82・85・89・94・95・97～99・102・105～107・109・110・128・135・136・141	24
34	北山	4			2		1						1						11～13	34・40・52・53
35	山間	11						1	4		2		4							56
36	中越	1						1										35		49
37	保美遺山西	1																		11・30・33
38	譲原	3									3							1		19
39	布施	1									1									11
40	矢瀬 ▲	50																69		61
41	深沢	13									8		5							晩期主体だが未報告で詳細不明。
42	立岩	1									1							63・66・90・91	後期配石出土例5・同土坑例2。	80
43	中村(仮)	1												1						4・60・66
44	小高神社(仮)	1																1		1
45	糸井(仮)	1									1									17
46	滝谷(仮)	2								1				1					44・100	4
47	宮ノ前(仮)	1																		14・33
48	六方(仮)	1													1			129		時期不明1点。
49	勝保沢(仮)	1									1									4
50	滝沢	1						1												12
51	前中後Ⅱ	2						1	1											12・30
52	北曲輪	1	1																	12
53	天神	1						1												83
54	八光	1									1									長谷川福次氏のご教示。
55	大道	20						1		4	8		7							69
56	上川久保	1																		75・76
57	北通	1						1												後期住居出土例4・同土坑例。
58	五目牛洞山	3						1			2									16
59	五目牛清水田	1									1									71
60	安通・洞	2																		48・58
																				後期住居出土例1。
																				73
																				82
																				31

番号	遺 跡 名	総数	前期	中 期		後 期						晩 期						図 番 版 号	備 考 (土偶出土状況等)	文 献
				阿 玉	勝 板	加 E	筒 形	ハート	板 状	山 形	木 瓦	その他	山形系	木 瓦	透瓦系	I 字	溝文系			
61	城	3	3													1～3		41・54		
62	前畑(仮)	1												1		121		33		
63	南原(仮)	2								1			1			62		41		
64	神社裏	1	1															46		
65	曲沢	3					1					2				24・39・41	松村一昭・英子氏のご教示。			
66	三和工業団地	1					1										平田貴正氏のご教示。			
67	石之塔	32						1		5		2	1	2	7	14	96・103・119・126・127・134・137～139	50		
68	北米岡	1								1						86		63		
69	木崎(仮)	1					1									26		8		
70	小町田	1						1								40		39		
71	相の原(仮)	1														1		5		
72	矢島	28								2				5	6	1	14	112～115・122・124・125	72・86	
73	大原道東	2														2		64		
74	上ノ前	1								1								42		
75	岩田(仮)	1									1							30		
76	板倉	4								1				1		2	57・120・123	33・67・68		
77	三島台	1			1											10	伊藤裕輔・増田修氏ご教示。			
78	千網谷戸 ▲	83					4	2		2		2	1	1	2	2	11	22・23・27・28・34・43・51・92・108・116・117・131・132・142	10・27・28・43・77	
																		後期住居出土例1・晩期配石例6。他に詳細不明土偶約56点有り。		
79	大門	1				1											14	中期住居例1。	20	
80	五科II ▲	4					1											他に時期不明土偶3点。	89	
合	計	507	15	2	7	2	24	23	7	127	4	50	9	16	18	5	2	86	時期・詳細不明110	

※ 遺跡名後尾に(仮)を有するものは、本稿で付した仮称である。また、同様に▲印を有するものは、未報告のために正確な形式分類や出土総数を把握できていないことを示す。

※ 後・晩期土偶の「その他」の分類項目は、各項目に該当しない形式や識別不能なものを含んでいる。

(4)
村糸井宮前遺跡の大規模集落では、土偶は検出されていない。ほぼ全面発掘された中期の大規模集落である赤城村三原田遺跡でも、土偶の出土はなかった。このことは、前・中期では土偶が必ずしも大規模集落に保有されていた訳ではないことを示していると言えよう。ところが、後・晩期では若干様相が異なっている。県内で土偶を30点以上出土した遺跡として、桐生市千網谷戸遺跡(Na78)、藤岡市谷地遺跡(Na33)、安中市天神原遺跡(Na14)、月夜野町矢瀬遺跡(Na40)、藪塚本町石之塔遺跡(Na67)等が上げられる。これらの遺跡の共通点は、中期に見られるほどの規模ではないものの、配石墓を中心とした集落構造をもち、後期から晩期にわたって長期間継続する拠点的な集落遺跡であること、そして耳飾りを初めとした装身具や石剣・石棒・石冠等の呪術具の出土量が多いことにある。その点では、小規模な調査にとどまった榛東村茅野遺跡(Na10)や明和村矢島遺跡(Na72)も、これらに含めて良いだろう。つまり、後・晩期では他時期に比べて多量の土偶を保有する遺跡例が増加するが、その背景には配石墓や呪術具等に象徴される呪術・祭祀的文化の高揚があり、それと連動する形で土偶祭祀が受容され活発化していること、それにかなり長期にわたる集中的居住が土偶数量の累積をもたらしていることが窺えるのである。晩期の土偶は細片が多く、形式分類や時期比定は容易ではないが、終末段階までは確実に土偶が存在しており、藤岡市沖II遺跡(Na31)では荒海式期の土偶が確認されている。

一方、県内の遺跡における土偶の出土状況については、既に能登健氏の分析がある。能登氏はまず、各時期の土偶を出土する遺跡は、一般的な立地を示す通常の遺跡であることを検証したうえで、前期後半の城遺跡、後・晩期では深沢、千網谷戸、谷地の各遺跡を取りあげ、住居や配石墓においてはその埋没土中から他の遺物とともに混在して出土していること、遺物包含層におい

でも土器や石器などの一般的な遺物と何ら異なった扱いが見い出せないことを指摘している。⁽⁶⁾今回あらためて、その出土状況について調査したところ、住居出土例が8遺跡で17点、配石墓を含む配石遺構出土例が4遺跡で17点、土坑出土例が6遺跡で7点の遺構出土事例を確認した。住居例では、床面出土とされるものが4例、炉内出土が1例あり、他は全て埋没土中から土器等と混在した状態で出土している。床面出土例は高崎市大平台遺跡(Na18)、赤堀町五目牛洞山遺跡(Na58)、榛東村下新井遺跡(Na11)、桐生市大門遺跡(Na79)での各1例である。この内の大平台遺跡例は後期のハート形土偶を出土するが、住居の時期は中期の加曾利3式期で明らかに混在である。五目牛洞山遺跡例と大門遺跡例は、ともに住居の遺存状態が悪くその出土状況も不明瞭であるが、少なくとも床面上に安置されていた状況は認め難い。炉内出土の榛東村下新井遺跡例は、まだ正式な報告がなされていないために詳細不明である。天神原遺跡や月夜野町深沢遺跡(Na41)等の配石遺構からの出土例は、いずれも破片あるいは大きく欠損した状態で埋没土中から出土しており、やはり遺構との有機的な関係を想定できる例は見当たらない。土坑出土例もその大半が先例と同様であるが、千網谷戸遺跡では遮光器系の中空土偶が浅い掘り込み内部から出土している。掘り込みの縁辺には大小の礫が数個あり、山梨県中谷遺跡⁽⁷⁾の土偶を出土した配石例に類似している。土偶は片手と両足を欠失した状態で、その縁辺寄りに横たわって出土しており、体部の遺存率が高いという点でも中谷遺跡例と共通する。

このような事例が今後増加すれば、土偶の使用方法を示す一例として具体的な解釈が可能となるであろう。しかし、これまでの調査では大半の土偶が他の遺物とともに混在した状態で出土しており、特定の遺構との関係や特殊な出土状況を見いだすことは難しく、今のところ能登氏の見解に変更を加える必要性は生じていない。

3 各時期の土偶の特徴

群馬県では現在のところ前期から晩期にかけての土偶が確認されている。ここでは管見にふれた507個体の土偶の中から、残存状態が比較的良好で全体形状や顔面表現、体部文様等の判別が可能なものを選出し、県内における各期土偶の特徴について概述していきたい。

(1) 前期(1～9)

1・4を除いた他の7点の全てが欠損品であるために、個別の詳細な特徴を把握することは難しいが、形態的には三角形(1)とバイオリン形(2～9)の2種類を認めることができる。基本的にいずれも非自立の板状形式で、バイオリン形を主体とした体部に頭部および横方向に延びる短い腕部が付くが、脚部は付されない。また、胸部が残存するもの(3～6・9)全てに小さな円形貼付の乳房が認められることから、乳房表現も基本的な特徴の一つと考えられる。顔面表現は全く無いか、あるいはあっても刺突孔による稚拙なもので、体部装飾のないものや丁寧な整形と軽い研磨が施されているものが多い。2・8は体部上半を、3・7は腹部以下を、5・6は頭部と腹部以下を、9は頭部を欠失している。

1は長さが3cmに満たない小形品で、三角形のプロポーションが特徴的である。また横にのびた腕部を除き、山形状の頭部や顔面表現を思わせる1点の刺突、それに下方にわずかに舌状に張り出す体部表現などは、他の土偶とは大きく異なる。3には体部と一体で作出された方形の頭部に刺突による円孔眼部や、やや上方に突き出た腕部の表現が見られる。4も3と同様の圭頭状頭部をもつが、顔の表現はない。5は横に伸びる両腕が6・9に類似し、両乳房の先端部は欠落する。6の顔面部は、やや前方に突出するように作出されることが欠損部の状況から観察でき、3・4とは表現方法が異なる。腹部の円形刺突は、臍の表現であろう。7は上端の周縁に沿って貫通孔が4個存在するが、配置的には5個付されていたと思われる。また、明瞭な頭部や腕部が作出されず、形態的には肩部と一体化した瓠形のプロポーションを有すると考えられる。8は表裏に半載竹管による集合沈線で文様が構成される。9は頭部が欠失するが、そのプロポーションは4とともに当該期の特徴を良く示している。

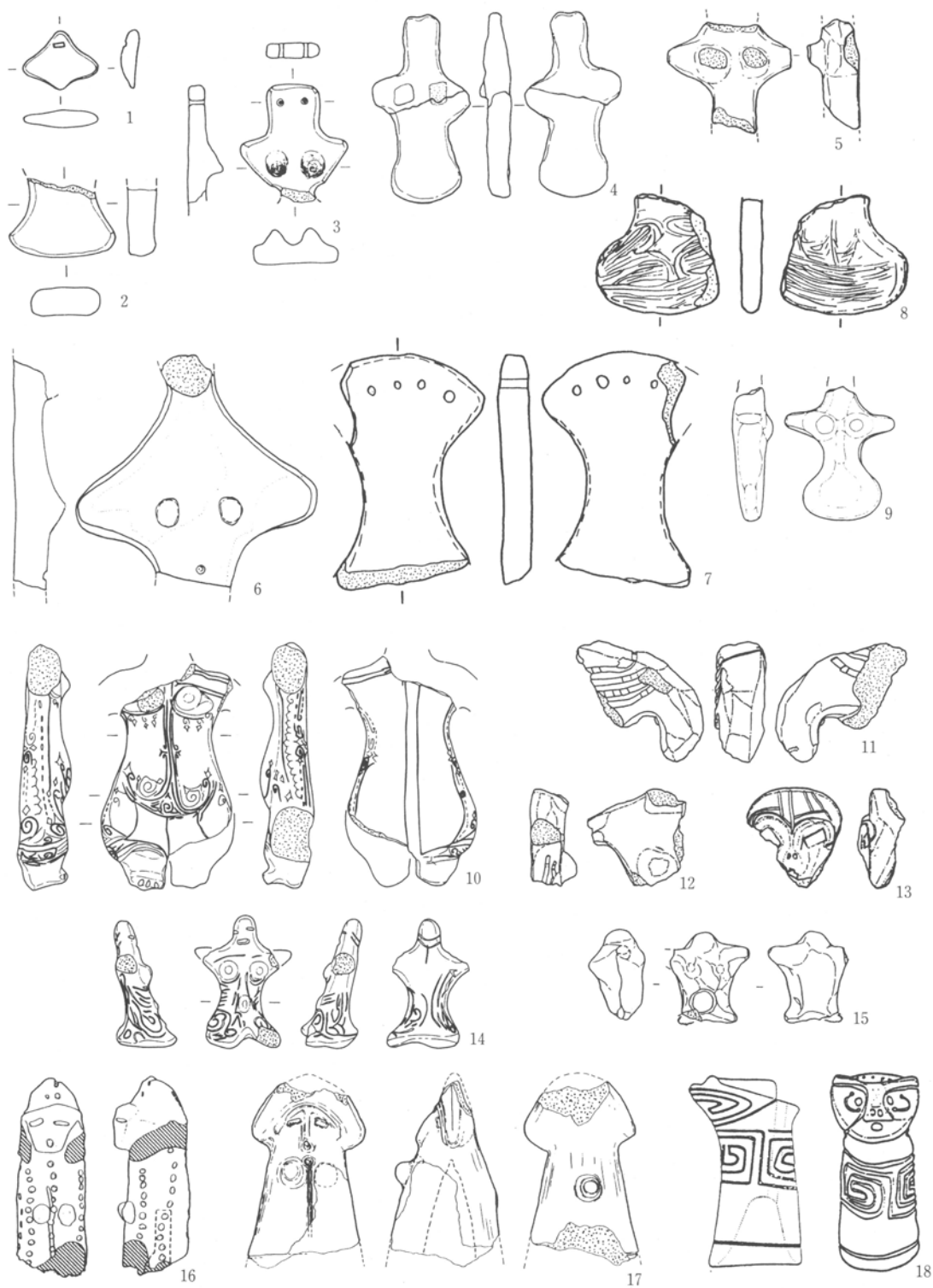
(2) 中期(10~15)

現在のところ中葉~後葉段階の11例が知られるのみである。縄文時代の全時期を通じて、集落規模やその数量がともに最大となる中での土偶検出例の少なさは、当地域の中期における土偶を用いた呪術的行為が極めて貧弱であったことを物語っている。

10は頭部と両腕・片足を欠失するが、明瞭に五体が表現されたやや大形の土偶である。パイオリン形の体部に前期土偶との類似性が窺えるが、腹部のふくらみや脚部表現に大きな違いがある。短い脚部には指の表現も加えられているものの、自立できる安定性は備えていない。作りはいたって丁寧で、側縁部・下腹部・胸部を中心に、細沈線で精緻な文様が施される。文様は渦巻文と矩形状の剣先文が主体であり、表裏面に施された正中線と肩部の横位沈線、それに腹部の沈線による対称弧刻文などが特徴的である。11・12は角押文を有するやや厚みのある板状土偶の体・腕部破片で、11は肩部の表裏に3条を、12は体部側面に2条を施す。11は撫で肩から短い腕部が垂下するが、12もこれに近い形態であろう。13は眉と鼻を一体化した弧状の隆線で表現し、額部に2単位の平行沈線を加えている。目は沈線状の、口は刺突状の凹点手法で表現され、鼻にも2穴の刺突が施される。14は小形の土偶で、高さは6.3cmである。体部が大きく後方に傾くが、脚部下端が大きく開くため自立可能である。両腕をやや上方に広げ、指頭状の頭部には掻き取ったような短沈線で目・口が表現され、体部には乳房と臍状の小突起が付される。脚部は楕円状に大きく張り出し、前面をくぼませて足先を表現している。文様は細沈線で裏面首筋に2条の弧線文を施し、胸から垂下する沈線と背面の弧線文との間に斜沈線を充填し、脚部には大きな渦巻文を施す。15は高さが4cmほどの小土偶で、粘土塊状の体部から頭部と四肢を僅かに突出させ、乳房とその下に円形の凹みを施した非自立の粗略な作りのものである。

(3) 後期(16~99)

前半期では、筒形土偶、ハート形土偶、板状土偶の三形態の土偶が確認されている。量的には筒形土偶24点、ハート形土偶23点と両者が拮抗しているが、郷原遺跡例を典型とするようなハー



※10・14は写真から図化

図2 群馬県の土偶(1)

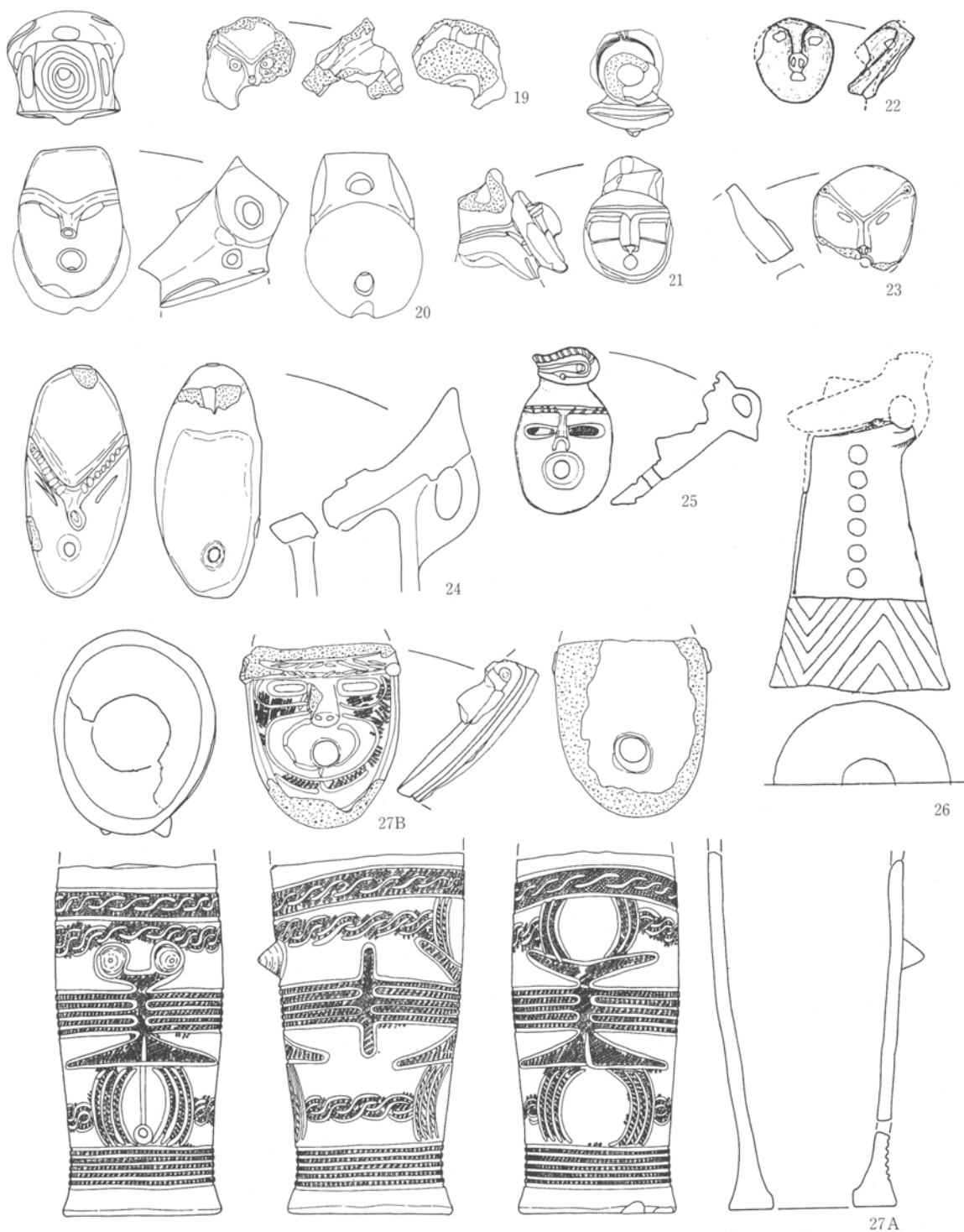
0 1:3 10cm

ト形土偶は僅少であり、むしろこのハート形土偶の部分的要素を有する立像土偶や板状土偶が主体を占めている。後半期は、山形土偶、ミミヅク土偶が確認でき、山形土偶は全時期を通じて最も出土量が多く、約127点が検出されている。後期のミミヅク土偶は4点と少量で、量的には晩期段階のものが勝っている。

筒形土偶 16～30の筒形土偶は、中空・棒状の体部に顔面部が付き、基本的に自立可能なものが主体を占める。体部の造作により、次の4つに分類できる。A類：棒状の粘土塊を底面から体部下半にかけてくり抜き、完全な中空状とならないもの(16～18)、B類：棒状工具の刺突による貫通孔をもつもの(26)、C類：輪積み成形による中空・円筒状のもの(19・21・27・28)、D類：棒状の体部下端が袴状に開いて僅かな挟り込みにより中空を意識したもの(29・30)、などである。顔面部の造作は、A類が体部と一体化してその側面や上端に表出されるのに対し、B・C類は体部と別個に作られた円板状の顔面を体部の上端に接合している。顔面部のみが残存する20・22～25等も、その造作からB・C類であろう。おのずとA類の顔面部は正面を向くものが多く(16・17)、B・C類は斜め上方を向くものが主体となる(18・19・21～23・26)。D類については判然としない。各類とも基本的に四肢の表現はないが、腕が付くものがD類にみられる(30)。また、後頭部に橋状把手やそれに類似した装飾を施すものがB・C類に認められる(20・24～26)。顔面表現のうち、口部は体部の貫通孔や空隙と接続する円孔表現と浅い刺突の凹点表現があるが、前者はB・C類に通有であり、後者はA類にのみ認められる。眉は鼻と接続して表現されるが、Y字状隆帯(18～20・22～24)と、T字状隆帯(17・21・25・27)、それに表現されないもの(16)とがある。鼻孔は2穴(18・22・23・27)と1穴(19～21・24・25)の表現が認められるが、総体的には後者が多い。また眼部は、刺突や短沈線などの凹点手法で描出されることを基本としている。

A類の16は男根状を呈する体部の先端に横向きの顔面を貼付したシンプルなもので、首部の巡りの隆帯貼付が剝落している。小さな円形貼付の乳房の間に正中線を引き、縦位の列点刺突を施す。体部下端を欠失するが、推定全長は10cm前後であろう。17は裾広がりの体部に扁平な山形状の頭部が付く特異な形状のもので、形態は16と同様に男根状を呈する。口は小さな円形刺突で表現されるが、内面の中空部まで達していない。沈線の正中線は口部下から垂下し、背面に沈線の小円文が施される以外は無文である。18は円筒状の体部に上方を向く顔面が付き、口の円孔は中空部まで達している。文様は後頭部に大柄の渦巻文、胴部に方形区画状のS字渦巻文を、各々沈線で施す。

19～25は、B・C類の頭部あるいは顔面部のみの資料である。顔面形状は円形の他に20・23のような楕円形のものもある。鼻と接続した眉はV字状につり上がるものが多く、郷原遺跡例のようなハート形土偶との共通性が看取される。21は体部側面に顔面が付く例で、体部の上端は螺旋状に開口している。24は切れ長の眼部と眉上の刻み目が特徴的で、頭部背面に橋状把手の剝落痕がある。25は眉上に左右逆方向の刻み目を施し、眼部は楕円状の沈線区画で描出して縄文を充填する。また口部の貫通孔周縁には沈線文が巡る。



※23・27は写真から図化

図3 群馬県の土偶(2)

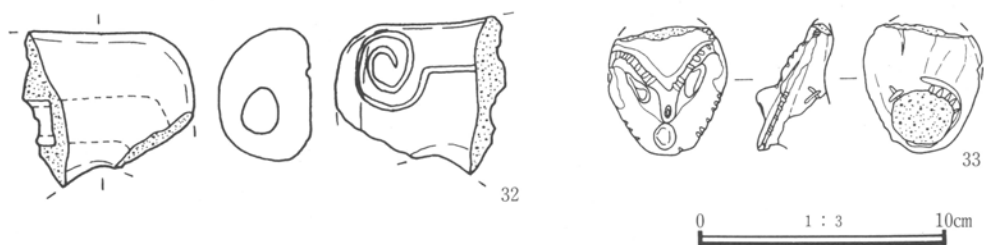
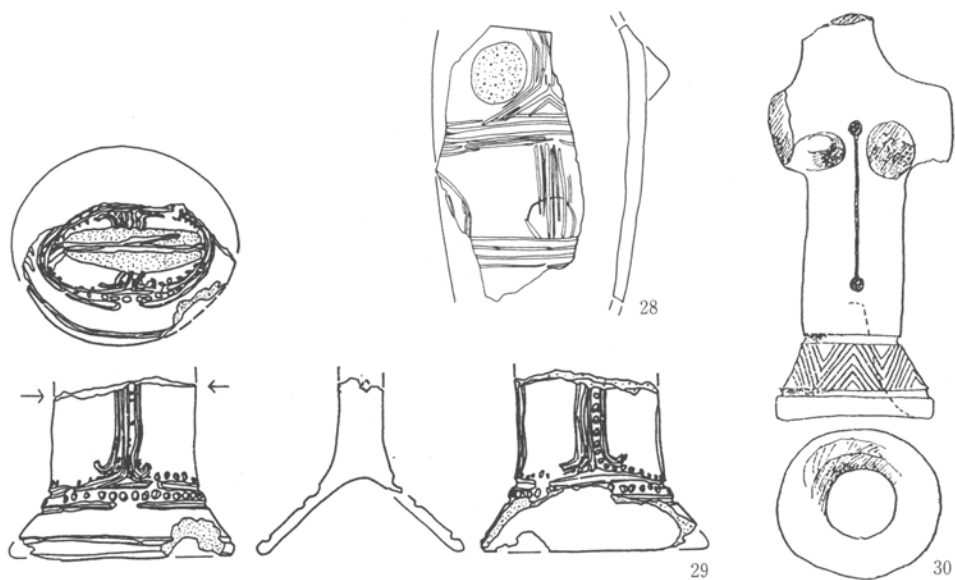
B類の26はやや大形のもので、裾部に沈線による重三角文が巡り、体部正面には沈線の正中線を、両側縁と背面は縦位の円孔列を施す。顔面部を欠失するが、把手の一部が残存している。

C類の27の体部文様は、上・中・下位に横帯文を巡らせ、正面および後背面には三角区画文と対弧文を組み合わせた文様を施す。また横帯文の間には連鎖沈線帯を施し、各区画内にLR縄文を充填している。円錐形状の乳房やその下位の正中線・円孔という一体化した構成に、土偶の明瞭な要素を看取できる。焼成前に穿孔された底面には網代痕が残る。顔面部は頭部とあごの一部を欠失するが、その描出方法は25とも共通する点が多い。一文字状の隆帯眉上に、左右逆向きの矢羽根状の刻み目を施す。眼部は沈線の圍繞で描出され、さらにその下位を弧状沈線で区画して充填縄文を施す。口部は円孔の周囲を2本の横帯文で圍繞し、円孔下に区切り線を施す。28も27とともに千網谷戸遺跡からの出土例で、類似した形態をとると考えられる。体部破片で、文様は条線状の集合細沈線で数帯の横帯文を施し、正中線の下位に円孔を意識したと思われる沈線の円文を施す。また同様の集合沈線を乳房の内縁に沿って弧状に施すが、乳房は剝落している。

D類の29・30は体部下端がスカート状に大きく開き、その内側は上げ底状に扶れている。29の文様は、下端に2条の横位沈線を巡らせ、正背面には2条の懸垂線とその両側に先端が鉤状にカーブした縦位沈線を付加し、各沈線間に列点文を充填する。両側面にも1条の縦位沈線を施す。板状の体部上半を欠失するが、この欠損部の長軸方向には小さな円孔が貫通している。30には腕が付くが、頭部とともに欠失する。下端の裾状部には26と同様の重三角文を施し、正面には乳房と両端に刺突を施した正中線が描出される。

ハート形土偶 31～43はハート形土偶およびその系譜を引く立像土偶である。31に見る斜め上方を向き前方に突出する平坦なハート形の顔面、隆起眼手法、後頭部の橋状把手、怒り肩とひじを張ったような短い腕部、細く括れた胴部と強く張り出した腰部、O脚で裾広がりの大きな脚部、集合沈線文とS字状渦巻文の施文、等の要素を完備しているものは極めて少ない。具体的には、正中線や背面の渦巻文の施文(34・35・37～39・42・43)、前方への顔面部突出(33・35)、後頭部の橋状把手(40)、胴部の括れやO脚部(34～37・41・42)に、31との部分的な類似性を指摘できる程度である。一方、丸味を帯びた体軀(37～41)、短沈線・刺突による凹点表現の眼・口部(33・37・39～41)、集合沈線文の希薄さと腰部に集中する文様構成(34・35・37)等は、顕著な差異といえる。眉は鼻と接続して隆帯で表現されるが、Y字状(33)とT字状(37・39・40)が見られる。鼻孔の表現は2穴(31)と1穴(33・37)、それに表現しないもの(39・40)が認められる。体部の造作は中実を主体とするが、大形品は中空のもの(31・32)もある。

31は著名な郷原遺跡出土の大形土偶で、目と鼻を強調したハート形の顔面が特徴的である。胸部には小さな乳房が付き、両端に刺突を付加した正中線を施す。また、肩・脚部の渦巻文や背面の2段のS字状渦巻文、集合沈線で構成される文様が体部全体を覆い、体部の縁辺に沿って列点文を施す。32は左腕部破片で、推定全長が31に匹敵する30cm前後の大形土偶であろう。平坦な背面に沈線渦巻文を描く。33は眉上・顔面と首の周縁部に刻み目を施す。34・35は角張った全体的



※28は写真から図化

図4 群馬県の土偶(3)

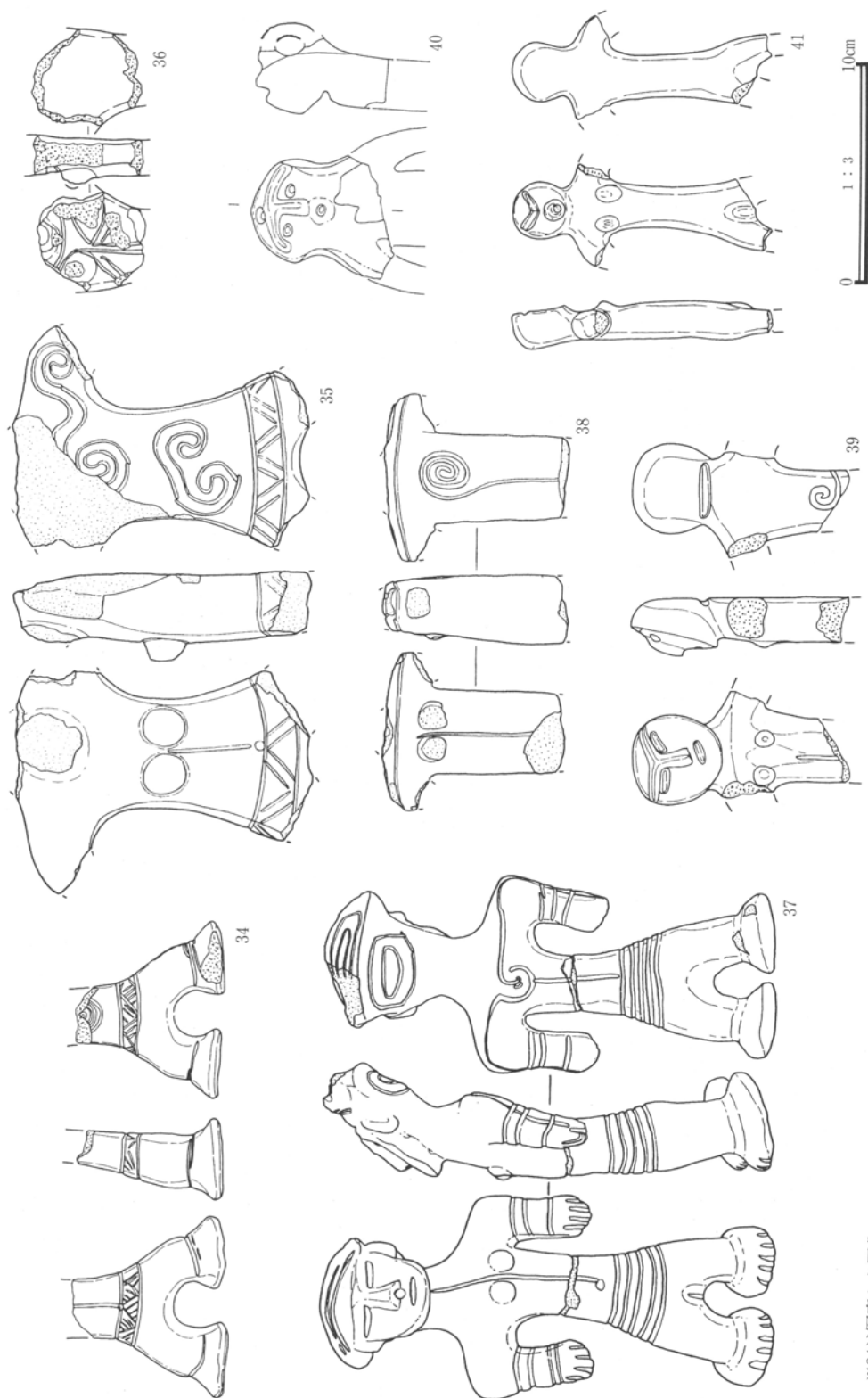


図5 群馬県の土偶(4)

※34は写真から図化



※43・51は写真から図化

図6 群馬県の土偶(5)

0 1:3 10cm

なプロポーションが31に近似し、腰部には26・30の筒形土偶に類似した鋸歯状文や重三角文が巡る。36も35に似た形態で、体部正面に正中線と縦位の三角文を施す。37は31と同様にほぼ全形を留めた希少例であるが、顔面表現は31とは正反対にかなり写実的で、両側に突起状の耳部が付く。平坦な頭頂部上面と後頭部には入れ子状に楕円沈線文を、額部に2本の横位沈線文を施す。横位沈線文が多条化する点を除けば、正中線下端に刺突を施すことや腹部に文様が集中する点は、34・35とも共通する。手足には指が、また下腹部には性器状の表現がある。38は肩部に沈線文が巡り、39は頸部背面に沈線文を、40の額部には刺突を施す。41は下腹部に性器状の隆起表現が見られるほかは全くの無文で、顔面部の眉・鼻も省略されている。42・43は活れない角張った体部形状が特徴的である。42の腰部にはパット状の突起を付し、背面には18の筒形土偶例に似た方形状の渦巻文を施す。また下腹部に、刺突による臍や性器状の表現がある。43は正・背面と側面に多条の沈線帯を配し、間隙に「の」字状文を施す。

板状土偶 44～50は板状土偶を一括した。いずれも欠損品であるが四肢が付くと考えられ、基本的には非自立形式である。前方に僅かに突出する顔面の顎部(44・45)、体部の正中線や沈線表現の円文・S字状文(44～49)、後頭部の橋状把手(45)や頭部の貫通孔(44・49)等に、31のハート形土偶との関連が窺える。しかし、凹点表現の眼・口部とT字状の眉・鼻(44・45・49)や括れの弱い長胴状の体部形状(45～50)は、むしろ38・42等との強い関係を示している。

44は後頭部にRL縄文とS字文を施す。45は鼻孔を1穴で表出し、顎部や後頭部の把手を欠損する。粗雑な点を除けば、背面の連鎖文は47の円文などと共に、各々27や17の筒形土偶のモチーフとも類似している。49は頭頂部が山形状に盛り上がり、後頭部に瘤状の貼付文をもつ点で先の土偶とはやや異質で、後述する55などの山形土偶に近いが、眼・口部表現や背面のS字状文、頭部の貫通孔等に前者らとの共通要素が見られる。50は正面にX字状の列点文、背面に菱形状の沈線区画文内に列点文を施すが、下腹部にも沈線区画の列点文が巡る。

その他の土偶 51～54は後期中葉段階の頭部および脚部例である。51・52は刺突による凹点表現の眼・口部を有し、顔面が僅かに前方へ突出する。51は後頭部が瘤状に丸味を帯び、半円状の耳部が眼部横に付される点で特徴的である。52は頭頂部が螺旋状に作出される。53・54の脚部は断面形が丸く、足先を大きくして安定感をもたせており、自立が可能である。モチーフは異なるが、ともに沈線区画文内に列点文を施す点は、50とも類似する要素である。53はO脚状に大きく開らき、腰部側面に42の意匠と近似した瘤状の突起を付す。やや膨らむ腹部の周囲に沈線を施し、背面には刺突列点文を充填した平行沈線文を施す。54はやや開きぎみに真っすぐ伸び、带状の沈線文間に刺突列点文を充填する。

山形土偶 55～94は山形土偶である。体部文様の施文手法を中心に分類すると、A類：沈線文+縄文施文(55～57)、B類：列点文+沈線文(58～65)、C類：列点文(66～69)、D類：沈線文(70～80)、E類：円形貼付文(81～83)、F類：円形刺突文(84)、G類：無文(85～90)に分けることができる。背面を中心としたモチーフには、弧線文と連繋した渦巻文(58・59・61・63・64・71・

73・74・84)が多用され、他に横帯文(59・63・64・68・69)、入組文(55・56)、羽状文(60)、X字文(66)、格子目文(70)などが見られる。またA・B・D類を中心に、腰部に禪状の沈線区画文を施して列点文や沈線文を充填するもの(58～60・64・65・77～80)が存在する。正中線は、A・C・E・F類(55・56・66・82・84)に若干見られる以外は顕著でない。顔面部の表現は、眉と鼻が一体化したT字状隆帯で表出される点で各類とも共通するが、眼・口部表現はB～F類が沈線や刺突の凹点手法を主体とし、B類の一部とA類(55・57～59)に粘土貼付の隆起手法が認められる。後者は、顎部が肥厚して表現される点でも特徴的である。また少数ではあるが、各類を通じて眼部(67・71・87)や眉・鼻(75・76・84・94)の省略されるものがある。耳部は小円孔で表現されるのを基本とするが、隆起手法の眼・口部を有するものを中心に表現されないもの(55・57・58・81・84・87)もある。また頭部背面には、髻状の突起(55・81)やC字状隆帯(58・59・61・62・66・71・72・93)、あるいは列点文や沈線文で表出したC字文(67・75)を有するものが目立つが、特にB類に顕著である。形態面では、体軀は偏平な板状形式を基本とするが、若干の丸味を帯びたもの(59・79・80)も存在する。頭部は横位楕円形状のものが大半で、山形状を呈するものはA類に限定される。胴部の活れや腰部の張出しの強いものは、腹部全体を肥厚させるか(55・56・59・63・64・70・73・74・78・89)、同部位に小ぶりの瘤状の貼付を施すもの(58・60・69・77・85・90)に広範に認められる。

A類の55は、背面の入組文と弧線文による区画文内にL R縄文を充填する。山形状頭部の側面には、49・66と同様の横方向からの貫通孔がある。56の背面文様も55に類似するが、入組文内に刺突を施す。57は眉と顎の隆帯に刻み目を施し、頬部に4～5条の浅い凹線を引く。後頭部にはL R縄文、瘤状貼付、帯状の沈線区画文を施す。

B類の中では、58・59は異質な隆起眼部や顎部隆帯を有するが、口部表現は58が隆起手法であるのに対して59は凹点手法と異なる。全体的なプロポーションや肩部の横帯文・背面の渦巻文等には、共通性がある。横帯文については列点や沈線などその描出手法に差があるが、他のB類の60・62～65の首部や腰部にも認められる。また、60は背面に羽状沈線文を、61は顔面に縦位沈線文を施し、61の後頭部のC字状隆帯は剥落している。

C類の68・69は、B類と同様の列点状の横帯文とともに膝頭に瘤状貼付を施すが、この瘤状貼付はF類の85・90にも認められる。また、66は上腕部と顎部背面にそれらと類似した瘤状貼付を有する。

D類の72・73の背面文様は、肩部の横帯文と体部縁辺に沿った弧線状の渦巻文で構成されるが、B類の58・59とも共通する。また72は口部下に沈線文を施し、73の顎部は隆帯貼付により肥厚する。74の背面も同様の文様構成で、71は眼部表現や横帯文が認められない。75は隆起眼部や凹点口部、肥厚した顎部等の顔面表現を有する点でB類の59と、76は隆起口部を有する点でA類の57との関連性が窺える。しかし、75の頭部横位沈線文の施文や76の眉・眼・鼻の省略は、57・59とは異なった要素である。また75は後頭部にC字状隆帯と弧状の平行沈線文を施し、76は顎部に平



図7 群馬県の土偶(6)

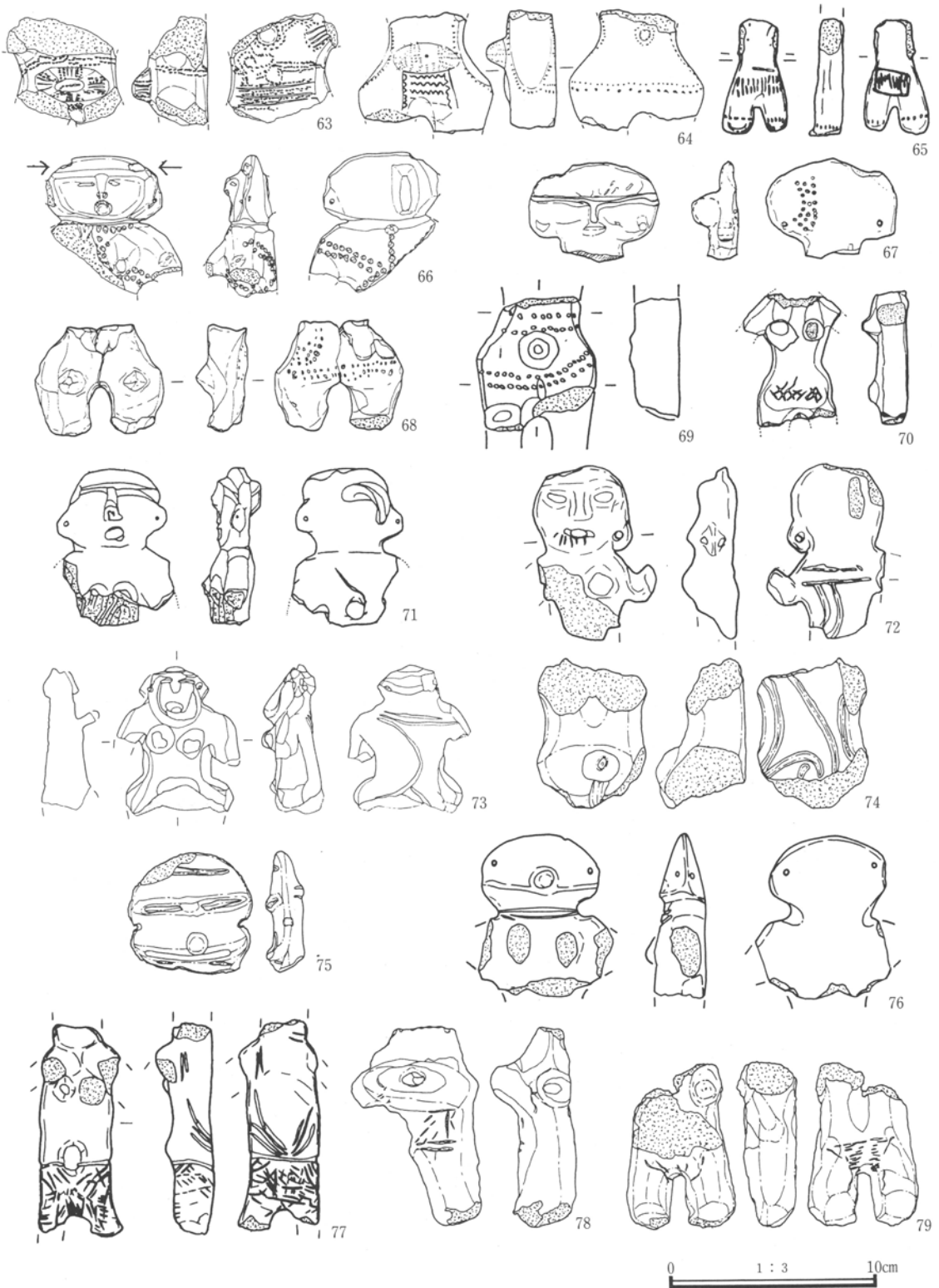


図8 群馬県の土偶(7)

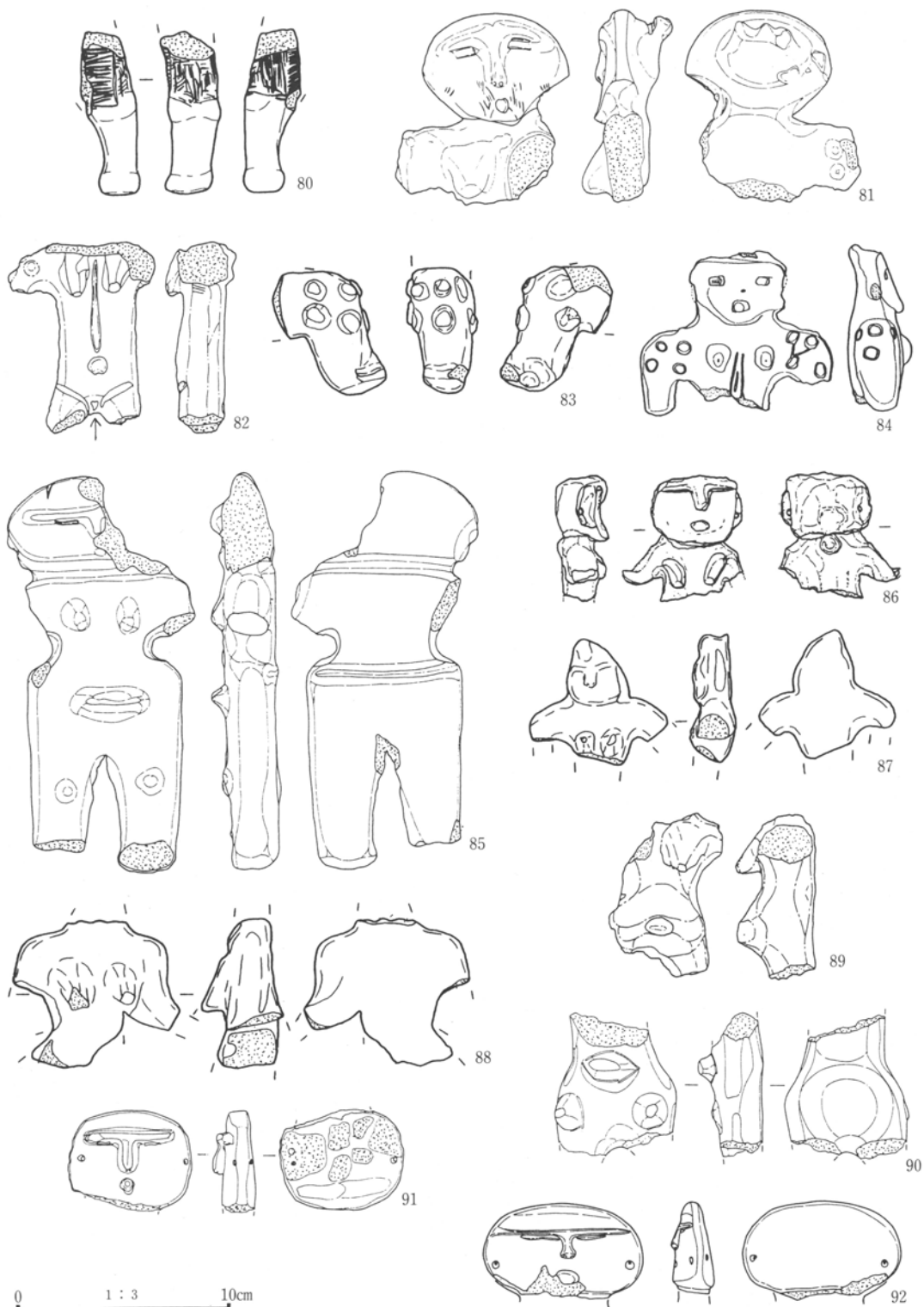


図9 群馬県の土偶(8)

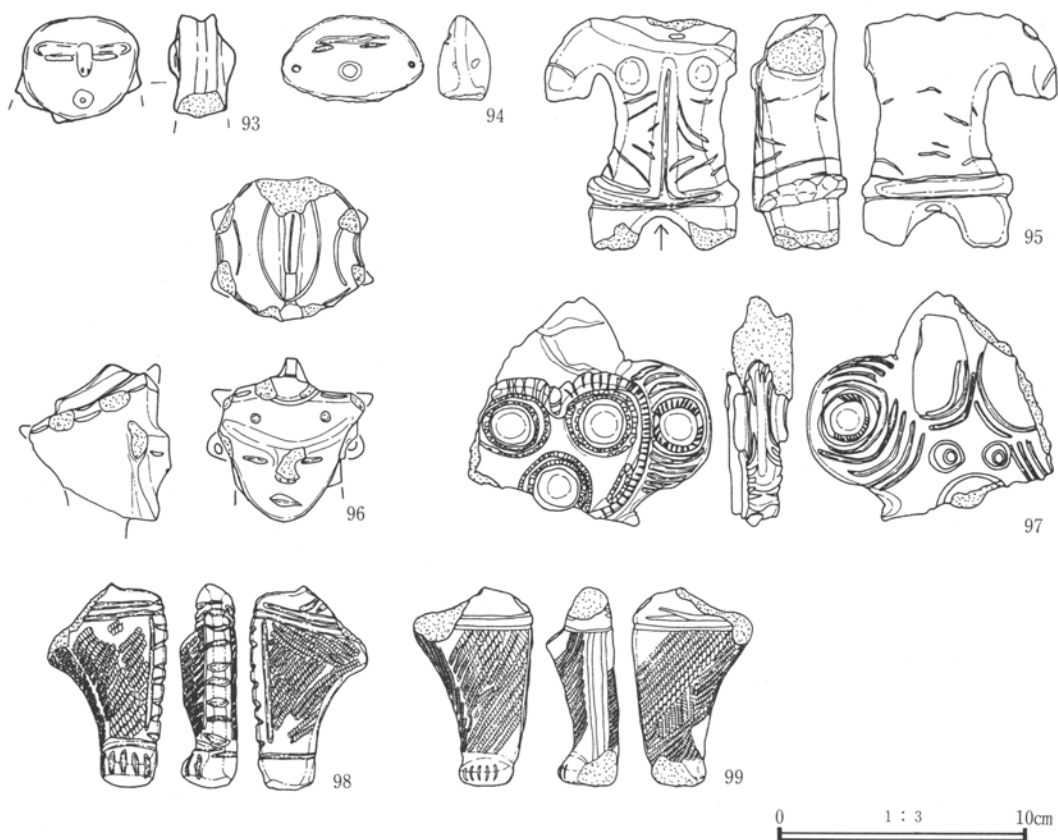


図10 群馬県の土偶(9)

行沈線文を施す。77は腹部に瘤状貼付をもつが胴部は括れず、腹部が膨れるタイプの中ではやや異質である。

E類の81～83は、肩部から腕部に集中して1列2～3個の円形貼付文を縦位に4～5列施すのが特徴的である。正中線等の表現は認められるものの、背面を含めて沈線や列点等の文様施文は極めて希薄である。81は口部周辺に髭状の沈線文を、82は臍状や性器状の凹点表現を施す。

F類の84は、E類のモチーフをそのまま円形刺突文に置換したもので、背面に平行沈線の渦巻文を施し、体部側縁に沿って列点文を加える。

G類の85～90は正中線や頭部背面のC字文状の表現が見られず、体部の装飾が希薄である。85は頸部が隆帯で表現され、頸部の周囲と背面腰部に、凹線状の整形痕が残る。86は乳房が肩から脇下にかけて弧状に付けられ、頸部背面には瘤状の円形貼付を施す。眉で区切られた平坦な頭部が特徴的である。87は耳・眼部を省略する。

91～94はB～F類のいずれかに該当する顔面部資料である。91～93はT字状の眉・鼻を有し、94は沈線で眉を表出して鼻は省略される。93の頭部の断面形は滑車状を呈し、瘤状の円形貼付が施された後頭部にC字状突起の剝落痕がある。

95・96は後期後葉に位置すると考えられるもので、前述の山形土偶とは異なった特徴を有する。95は正中線と腰部を巡る隆帯が一体化して表現され、小さな円形の乳房とO脚部が特徴的である。表面の風化で不明瞭だが、体部には菱形か矢羽根状のモチーフを描出するようである。頭部の接合部と股間部に刺突を施す。96は眉・鼻のT字状隆帯表現と眼・口部の沈線による凹点表現に、山形土偶との系譜関係が窺えるが、頭部の装飾や形態に大きな差異がある。頭頂部は平坦な六角形を呈し、その各辺側縁部には横位の短沈線を施す。また中央部には弧線文と鬚状の突起が付き、その両側にも対弧状に弧線文を施す。さらに額部には2個の刺突が見られる。

ミミズク土偶 97～99はミミズク土偶である。97は円形貼付による眼・口部の周縁に2条の有節沈線文を巡らせ、顔面をハート形に縁どる隆帯や耳部には刻み目を施す。98・99は脚部破片で、足先に刻みを加えて指を表現し、98は側縁部にも刻みを施す。ともに腰部には横帯文が巡り、L R縄文を施文している。

(4) 晩 期(100～145)

前半期では、後期末葉からの斉一性の強いミミズク土偶、東北地方からの影響によりかなり変容を遂げた山形土偶系統、ミミズク土偶から派生した土偶、いわゆるI字文土偶系統の土偶、それに在地的な変化を遂げた遮光器形土偶系統の土偶などが認められる。後半期は前半期に比べて量的に少ないが、千網式期に特徴的な浮線網状文をもつ土偶のほかに、終末段階の有髯土偶が認められる。

100～105は眼・口部の凹点手法や顔面形状・耳部の穿孔等から、山形土偶の系統と考えられる。100は太い隆帯により、鼻から眉にかけて数字の「3」が横転したようなモチーフを描く。これは101の眉とも共通しており、T字状隆帯の変化としてとらえることができよう。102・104は眉の隆帯上や顔面輪郭に沿って刻み目が施され、ミミズク土偶の影響が看取される。また、104の頭頂部が横方向にV字状に挟れる形状も、その影響と考えて良いだろう。100・101・103の体部文様には、沈線の渦巻文・円文や三叉文が施される。また101～103の口端部には、弧状や三角状のモチーフが描かれ、従来より説明されてきたように、東北地方の平行段階の土偶との系統的関係が想定される。

106～115は安行2式に後続する晩期のミミズク土偶あるいはその系統に連なる土偶である。109は頭頂部装飾が三単位の小突起からなるが、107・108・114は左右に二分割されるもので、114はより簡略化されている。115は頭頂部装飾がなく、眼・口部の円形貼付の上に刺突を加え、顔の輪郭部や体部にも刺突を施す。108の表裏面には入組文を施す。110はX字状隆帯とそれに規制された横・斜位の沈線文を施し、背面には蕨手状沈線文を付加する。113は入組文とやや崩れた玉抱き三叉文を施す中空土偶である。縄文施文は、108・109・113がR L、112・117がL R。106は楕円形状の隆起眼部や凹点口部、それに双環状の頭部装飾を有する点で107～109等とは異なる。

116～119は、遮光器形土偶の前段階の東北地方からの影響を強く受けて成立した土偶である。116と118は腰部のベルト状や正中線状の隆帯の有無により異なるが、ともに板状の中実土偶で入

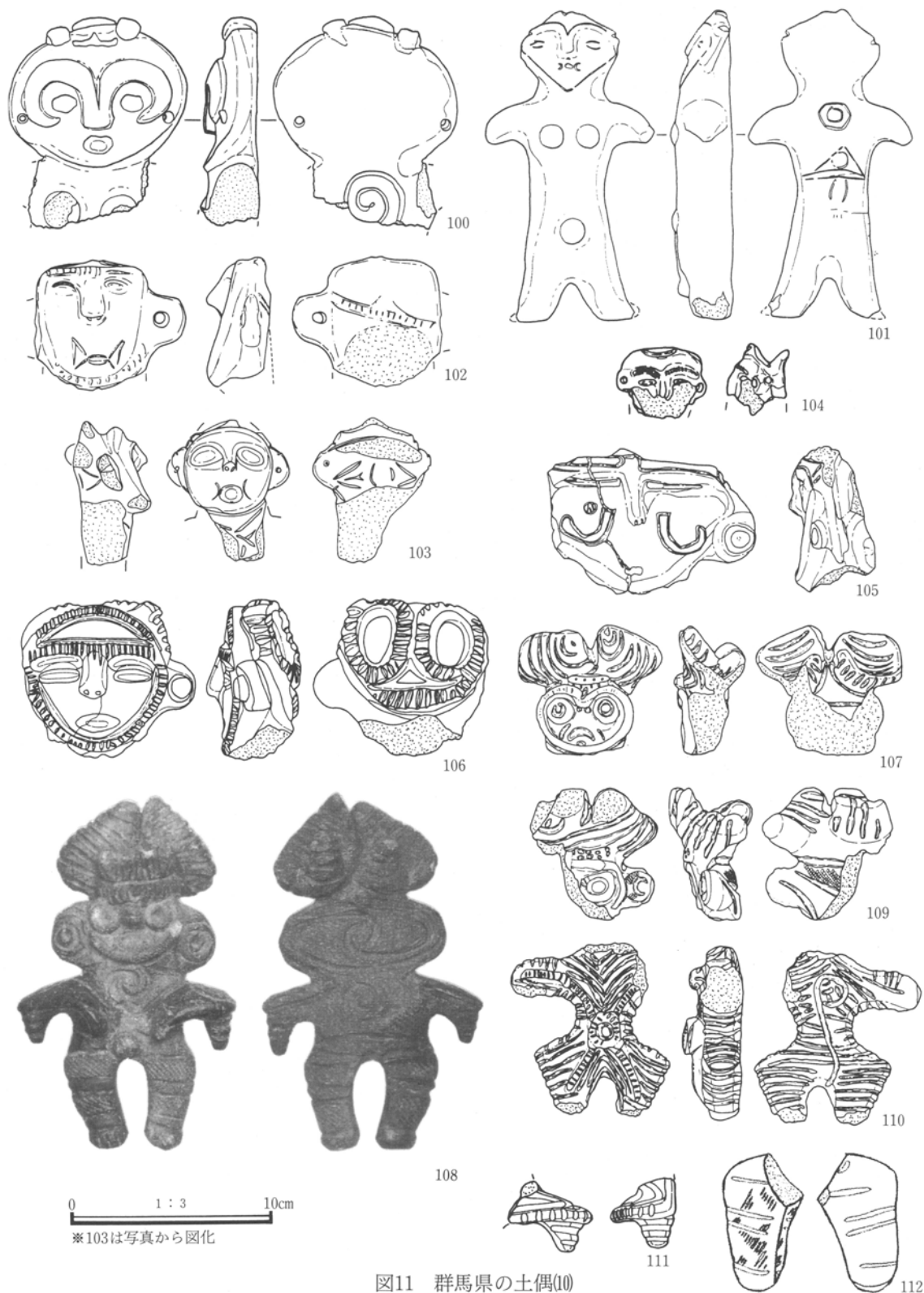
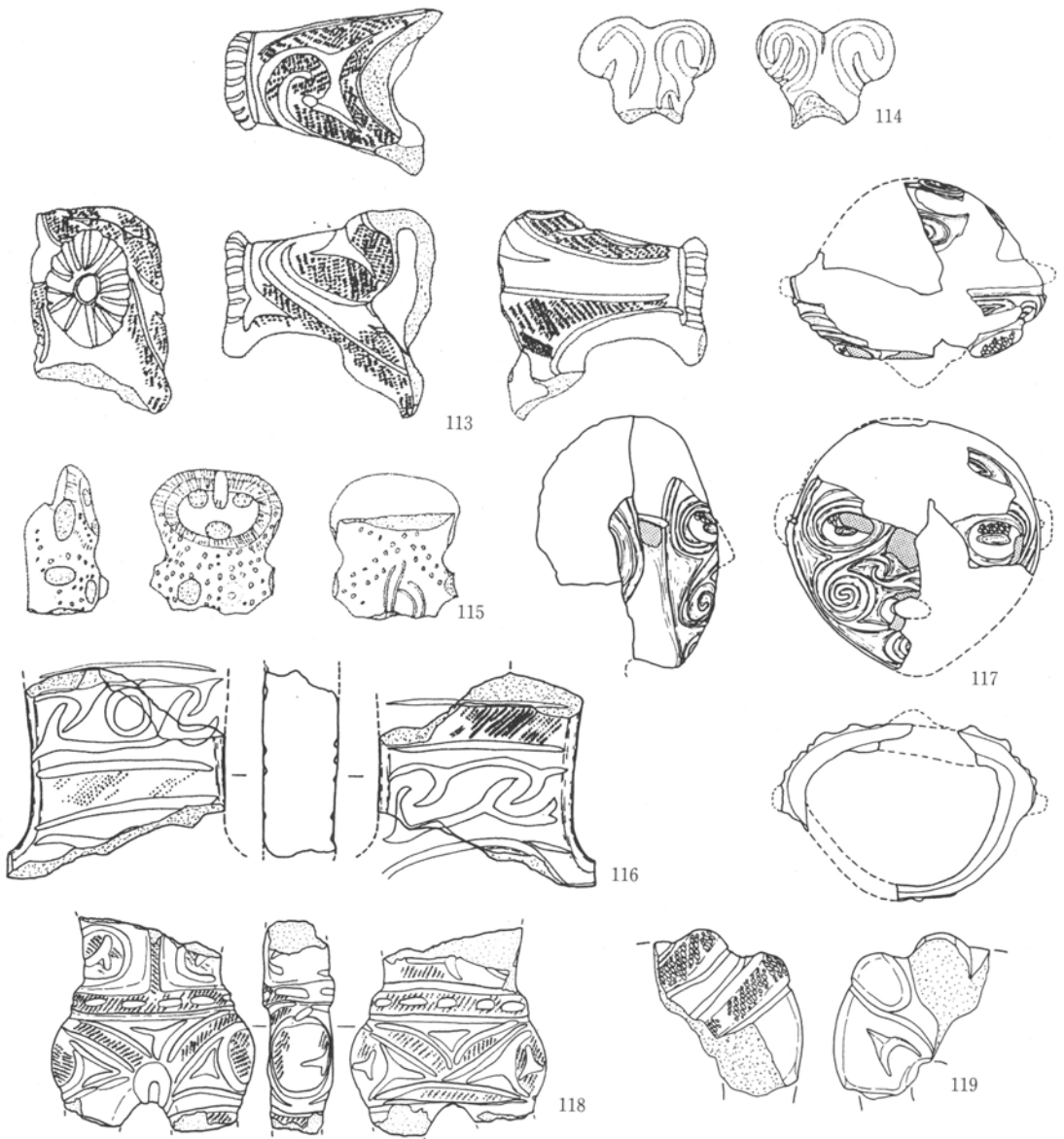


図11 群馬県の土偶(10)



※119は写真から図化

図12 群馬県の土偶(11)

組文や三叉文が描出されている。117は浮彫的なS字状入組文と三叉文をもつ、かなり特異な大形中空土偶の顔面部であり、楕円形隆起眼の上端に縄文が施文される。119は左肩部の破片だが、肩パット状の隆帯装飾の裏面には三叉文が印刻されている。

120～127は形態や部分的な装飾において、忠実にではないが遮光器形土偶を模倣している一群である。120は頭頂部が開口する中空土偶で、遮光器形土偶との関係が「かろうじて後頭部表現、頸部、肩部、下腹部の鎖状隆帯につながりを見いだすことができ」、121は手部の二又表現や胴部との境の截痕列状の文様に、その類似性が指摘されている。縄文はともにL R。122・123は腰部

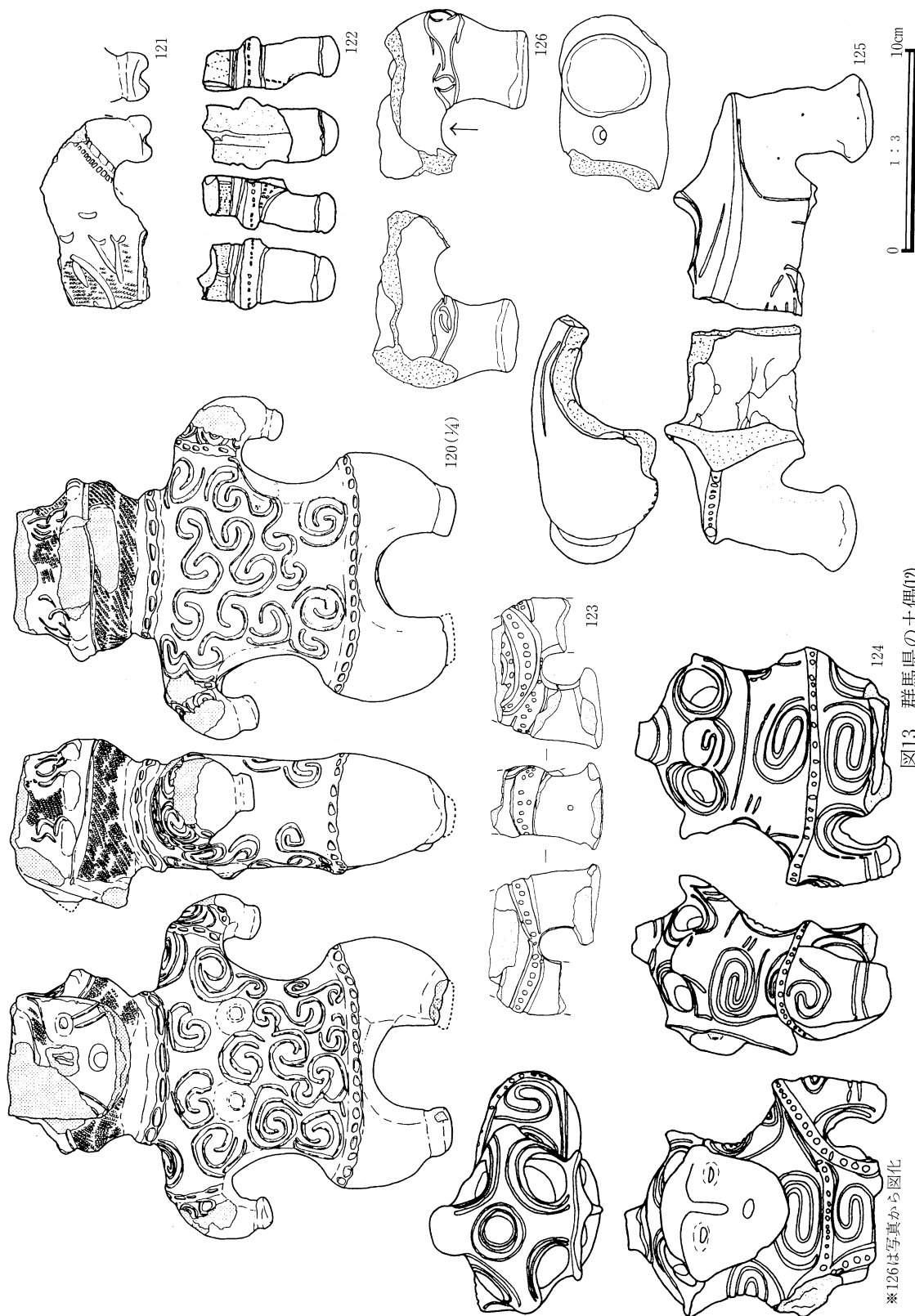


図13 群馬県の土偶(2)

※126は写真から図化

を巡るの隆帯や刺突文、それにO脚状の脚部に類似性が認められ、122は腹部に鋸歯状の列点文が巡る。124～126も120と同様の中空土偶である。124は頭頂部に十字に交差する王冠状装飾が施され、その交差部には中央の凹む臼状の突起が付される。肩部から体部には、列点文をもつV字状の隆帯が貼付される。顔面を除いて、渦巻き状の沈線文が施文されるが、120に見られるようなC字状の入組沈線文の中心先端部が相互に連結したものである。仮面状の顔面部や楕円隆起眼・凹点口部の表現方法は、120とも共通している。125は手の形状や文様施文がやや異なるが、肩部に124に類似した隆帯が巡る。126はO脚状の脚部付け根に、三叉入組文が簡略化されたレンズ状の区画文様が施され、股間部には穿孔がある。127は容器形を思わせる中空土偶で、頭部側面の3カ所が大きく眼鏡状に穿孔され、その内の2カ所が眼部表現となる。後頭部の穿孔周囲には突起状の装飾が施され、頭頂部には「目」字状の隆帯が貼付されている。

128～130はいわゆる「I字文土偶」やそれに類似するものである。128は表裏面とも沈線文と三叉文により文様構成され、裏面は三叉文が沈線文で連結されて対向するモチーフが表出される。129はI字文の両端が相互に連結したモチーフで構成され、正中線や肩・胸・腰部の沈線区画文内に列点文を充填する。胸部の正面に刺突を、背面に二重の円文を施す。130は腕部破片であるが、129に類似したI字文が施される。

131・132は浮線網状文やそれに類似した沈線文が施される中実土偶である。132は3～4本の浮線文が4単位で巡り、集約部に縦位の短沈線が施される。131も同数の沈線文が巡るが、集約部は見られない。

133～143は前述の土偶以外の系統が不明瞭なものを一括した。133～136は凹点の眼部や口部を有する一群である。133は横長の凹点眼・口部をもつ。134は中実の体部中央から口部へと抜ける貫通孔をもち、頭部裏面にH字状に隆帯を貼付する。135は顔面が真上を向き、頭部に3本の横位沈線文、背部に隆帯の菱形モチーフを描く。口部を欠くが、肩から横方向に伸びる前足状の突起があり、動物土偶の可能性もある。136は眉上や目・口・耳部の周囲と頬に刺突を加え、頭頂部はV字状に扶れる。137～139は、凸点眼部と凹点口部をもつ。137は134と同様に眉の表現がなく、裏面に隆帯の剥落痕がある。138・139はT字状の眉・鼻と楕円隆起眼をもつ。138は頭頂部にアーチ状の突起が付され、139は眼部上位に沈線文と両頬に細かい刺突を加える。140は明瞭な眼部表現がなく、T字状の眉・鼻と凹点口部をもつ。141・142は明瞭な顔面表現が認められないが、141は凸点眼が剥落した可能性もある。143は142と類似した作りの粗雑なもので、短い脚部をもつ。

144・145はいわゆる「有髯土偶」と呼称されている板状の土偶である。144は体部に比して大きな扇形の頭部を有し、体部下端を幅広に平坦化して自立機能をもたせている。左腕の接合部周辺には、タール状の付着物が見られる。顔面部は凹点眼部・隆帯口部と穿孔耳部が表出され、周縁部に沈線文を施す。145の頭部形状は144と類似し、顔面部は剥落しているがその周縁部に重弧状の沈線文を施す。



図14 群馬県の土偶(13)

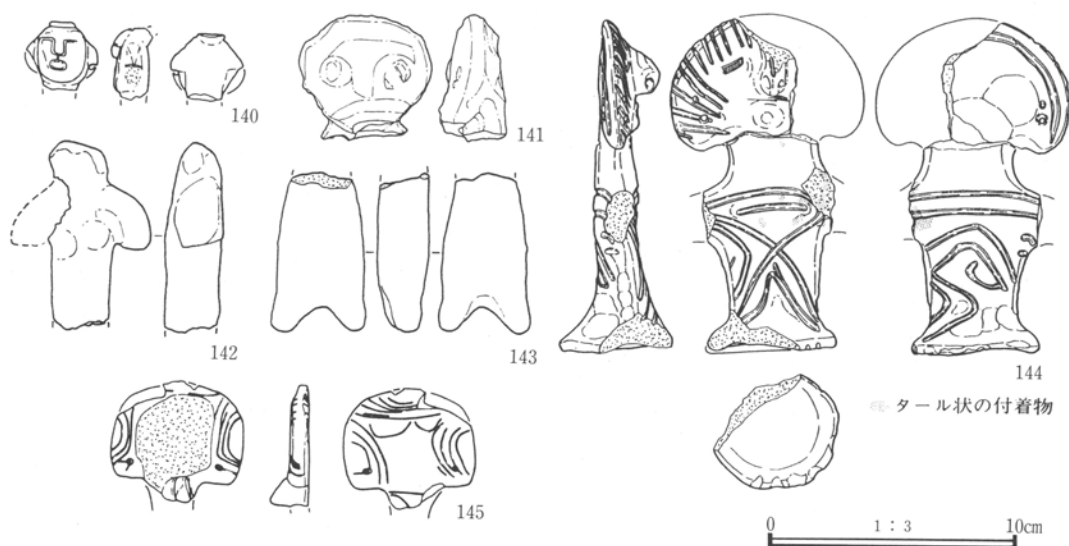


図15 群馬県の土偶(14)

4 土偶の時間的位置と地域的様相

前章で取り上げたの各土偶の時間的位置については、そのほとんどが遺物包含層からの出土であり、土器との相伴関係を基にした明確な位置付けのできるものは極めて少ない。しかし、近年何人かの研究者により、土器文様との対比を通じてその帰属時期や系統の変遷が論じられており、ここではそれらの論考を参照しながら、時間的な位置付けと共に地域的な様相の実態を探ってみたい。

(1) 前期

前期の土偶は、他時期に比べて土器型式との関係がかなり明瞭に把握できる。1～3は丘陵斜面に大量投棄された土器類と共に検出されたもので、土器は諸磯b式期に限定されることから、当該期に比定して良いだろう。4は丘陵斜面からの表採品である。土器は諸磯b式が主体であり、形態的にも3と共通することから、同時期の所産であろう。5～7はいずれも住居の埋没土からの出土であるが、伴出土器は5が諸磯b式、6・7が諸磯c式であり、各々当該期に比定できよう。8は7と同一遺跡の古墳時代住居から出土したものだが、下半部の集合沈線文の特徴から諸磯c式期の土偶と考えられる。9は遺構外からの出土品で相伴の土器資料はないが、前述したように形態的特徴は他と共通しており、諸磯式期に含めて問題ないであろう。

現在のところ、前期土偶の検出例は諸磯b・c式期に限定されているが、文様施文の有無や顔面造作を主体とした形態には、若干のパラエティーの存在と時間的な変化が看取される。例えば、プロポーションではb式期に三角形状(1)と小形のバイオリン形状(3～5)の二者があるが、c式期ではバイオリン形状を基本とするようになり、形態的により斉一性の強まりを感じさせる。また顔面造作では、b式期が体部と一体の平面的なものであったのに対して、c式期には6のように立体的となる徴候がみられる。体部への文様施文もb式期にはなく、8のようにc式期になっ

て認められる。以上のことを要約するならば、b式期とc式期との土偶の間には、次のような変化の方向性を指摘することができる。それは、①平面的な顔面(頭)部から立体的な顔面部への変化、②無文から有文への体部の加飾傾向、③大形品の出現、の3点である。②・③については、埼玉県西大宮バイパス№4遺跡や千葉県庚塚遺跡の早期段階の板状土偶にも確認でき、諸磯c式期の特徴とは言い切れないが、これらの特徴が諸磯b式期には希薄であることから、早期からの系統の変遷ではなく、c式期に改めて出現するものであろう。

こうした変遷とは別に諸磯b式期の1・3・4やc式期の6・7に見られるように、形態や顔面表現にタイプ差とも言うべき特徴が認められるが、これらの系譜をどのように考えるのが問題として残る。これについては、既に小野正文氏や原田昌幸氏らの論考の中で触れられているので、参照してみよう。小野氏は、4を茨城県花輪台貝塚のバイオリン形土偶に系譜を求め、愛知県二股貝塚例を含めた形態の連続性をもつ一類型として位置付けている。また、3は愛知県大曲輪貝塚例による大曲輪タイプの系譜を引き、宮城県糠塚遺跡の土偶などとも脈絡を有する点が指摘されている。一方、原田氏は早期後半の東日本地域では土偶の存在が途絶えることから、同段階に中部・東海地方に定着した入海タイプにその系譜を求め、従来では大曲輪タイプに一括されてきた7のような頭部に数個の円孔をもつ土偶を、あらためて諸磯タイプと呼称している。また原田は平行期の東北地方で、圭頭状頭部と胴部中央に円形の凹み表現を有する土偶が成立することを述べ、これを大木タイプと呼称している。

両氏の考え方に大差は無いが、諸磯式期のバイオリン形土偶の系譜については、関東地方の早期後半で一旦断絶することを考慮すれば、原田氏の言うように入海タイプとの関係で把握することに整合性があるだろう。また、原田氏が設定した諸磯タイプは、諸磯式土器に伴う大曲輪タイプを呼び換えたものであるが、先述したように諸磯b式期にはこれとは別タイプの1や3が存在している。3に関しては、基本的なプロポーションにおいて、4と共に愛知県二股貝塚や入海貝塚の入海タイプの系譜上に位置付けることに問題はないだろうが、顔面部の刺突孔や圭頭状の頭部形態等の点で、大曲輪(諸磯)タイプとは異なっている。むしろこれに類似する例は、宮城県糠塚遺跡例⁽¹²⁾をはじめとした東北地方の大木タイプに広範に認められる。しかし、この大木タイプの系譜についても、東北地方の早期に求めることができないようであり、3なども含めて入海タイプから分岐・伝播したタイプの可能性も考えられる。この仮定が正しいならば、頭部相当の部位近くに刺突を施す三角形の1は、やはり糠塚遺跡等から出土している頭部を突起状に表現し、頭部の下位に円形の凹みを表出するタイプとの関連で把握することができるのではないか。3はプロポーション的にも、大木タイプの胴部下半を省略化した形態に類似する点で示唆的である。また、7は円孔表現が大曲輪タイプと共通し、同タイプに比定し得るが、頭部の作出を欠いた全体的なプロポーションでは大きな違いを見せている。

資料的な制約もあり断定的な事は言えないが、前述のあり方を総合的に見れば、県内の諸磯式期土偶には少なくとも4つのタイプが存在するようであり、かつかなり広範囲な地域との関係を

窺うことができる。こうした背景には、諸磯b式土器の分布の広域性に象徴される文化の動向が、少なからず介在しているように思われる。

(2) 中 期

各土偶は土器との共伴関係をもつものが少なく、その詳細な時間的位置は判然としないが、他地域の資料も参考にしながら考えてみよう。10は腹部のやや膨らむプロポーションや乳房下位の弧線文、正中線下端のハート状文、下腹部に施された沈線表現の対称弧刻文、大腿部への文様施文の集中などに、中部地方の勝板式系土偶との共通要素が認められる。しかし、体部の表・側面に施文される渦巻文と剣先状の菱形文とが組み合ったモチーフ等は、それらの中に見出すことができず、当地域で在地化された要素と考えられる。時期的には、沈線化してはいるものの基本形を留めた対称弧刻文や全体的なモチーフからみて、勝板式末期段階に比定されよう。11・12は体部の角押文が、常陸・下総を中心とした関東地方東部に散見される中期中葉期の土偶に類似している。特に11のように、肩部に横位の角押文や有節沈線文を重帯させるモチーフは、阿玉台式期の茨城県諏訪台遺跡例や大木式7b式期の福島県七郎内C遺跡例に認められ、阿玉台式期の土偶の一要素とも考えられる。しかし、先の阿玉台式期土偶のプロポーションは、腕部がほぼ水平に横方向に延びて十字形となるものが多く、11のように垂下するものは見当たらない。このプロポーションは、東京都TN46・72遺跡等から出土した「多摩丘陵形態」と呼称される勝板式系土偶に認められ、11もこれらとの系統的な関係が考えられる。また腕部のみを対比すれば、10とも共通すると言えよう。13は頭部破片のみで判然としないが、頭部の沈線による有髪表現や顔面造作に、長野県波田町葦原遺跡の曾利1～2式期の唐草文系土偶との類似性が見られることから、これに近い時期とみて良いであろう。14は加曽利E3式初頭段階の住居から出土したもので、同期に比定される可能性が高い。加曽利E式期の土偶については安孫子昭二氏の論考⁽¹⁹⁾があり、それが「連弧文土器様式に伴う土偶」で多摩丘陵を中心とした関東地方西部域に多出することや、5段階の変遷と6つの基本形態を有することが明らかにされている。これに従えば、14はA2形態の第3～4段階に比定されるが、これは先の住居の出土土器とも時間的に整合している。15の腹部に付された円形の凹みは、宮城県糠塚貝塚例をはじめとした東北地方の前期板状土偶のそれとも類似するが、稚拙ながらも頭部や四肢の表現された全体的なプロポーションは、むしろ14と近似している。「連弧文土器様式の土偶」の第5段階は、体部装飾が省略されることや、同段階の稲城市平尾2遺跡出土例には胸部に円形の窪みが見られる点を考慮すると、15も第5段階すなわち加曽利E3式後半段階に比定されるものであろう。

集落遺跡の数量やその規模が前時期に比べてかなりの増大を見せ、しかも発掘による遺跡調査の機会が多い中で、土偶の発見総点数が前期と同数の10点しかないことは、中期における当県域内での土偶祭祀がいかに低調であったかをよく物語っている。こうした現象は、多摩丘陵などの西部域を除けば、関東地方のほぼ全域に認められるものであり、当地域もそうした文化的斉一性を共有すると理解することもできよう。しかし、土偶を多出する長野県域と隣接する地理的環境

を加味した場合、この点数は余りにも少なく、その背景には他の要素の介在を想定する必要があるように思われる。例えば、土器の分布圏との関係はどうだろうか。中葉段階の当地域は、勝坂式の存在が阿玉台式をかなり上回っているが、その勝坂式も長野県中・南部域のものとは異なり、「沈線爪形文土器」や「新巻類型」・「焼町土器」・「三原田式」⁽²¹⁾といった在地的な土器型式を中心に構成されている。これらは勝坂式だけでなく、北陸の上山田式や東北地方南部の大木7b・8a式などの影響下に成立するものであるが、結論的に言えば、これらの土器型式を保持する集団が長野方面との深いつながりを持ちながらも、土偶祭祀をほとんど受容しなかったということに起因すると考えられる。

一方、阿玉台式土器も少なからず存在しているにもかかわらず、阿玉台式系土偶の存在が極めて希薄であるのはどのような理由によるのだろうか。現段階での阿玉台式系土偶の分布は、同式土器の分布圏のほぼ全域に認められるが、その中心は常陸・下総などの関東地方東部域であり、北部域はその周縁の様相を呈している。このことは、各地域の阿玉台式土器文化自体が、必ずしも等質に土偶を保有するものではなく、東部域の地域性として把握される可能性を示すものであろう。この背景には、阿玉台式土器とも密接に関連する「七郎内C遺跡第II群土器」⁽²²⁾の介在も考慮する必要があるように思われる。

いずれにしても全体的に見れば、中葉期の土偶は阿玉台式系の要素を僅かに含みながらも、勝坂式系を主体に構成されており、当地域が勝坂式系土偶文化圏の影響下にあったことを示している。そして後半期の加曽利E式段階では、西関東系の連弧文タイプとも言うべき土偶が前段階にも増して僅かに存在するが、それは県内での客体的な「連弧文土器様式」の存在とも軌を一にしている。

(3) 後 期

筒形土偶 筒形土偶については植木弘氏の体系的な研究があり、関東各地の資料を駆使して称名寺式期から堀之内2式期にかけての四段階の変遷を論じている。⁽²³⁾これらの論考中に当県の資料も取り上げられ、16は筒形土偶出現期の第1段階（称名寺式期）、17は第2段階（堀之内1式期古段階）、18は3段階（堀之内1式期新段階）への過渡期、26は第4段階（堀之内2式期）に比定されている。また、30は前者らとは別タイプの「内匠タイプ」と呼称され、第4段階に比定されている。植木の時期比定は、胴部・顔面部の造作方法の変遷や体部文様を土器文様に対比させてのものであり、これに倣うならば、顔面部が胴部から独立するものの板状とならない20は第3段階、顔面部が板状となる19・21～24は第4段階であろう。また、板状の顔面部は第4段階と変わらないが、27にみる連鎖状・対弧状・三角形の沈線文モチーフや横帯文は、千葉県良文村貝塚区貝塚出土の注口土器⁽²⁴⁾や茨城県福田貝塚出土の鉢形土器⁽²⁵⁾のように、加曽利B1式期の土器に多用されることから、同期に比定することができる。形態上でも土器の底が抜けたようなプロポーションや、体部側面を貫通する円孔は、茨城県戸立石遺跡例のように第4段階にも認められ、前段階から引き継がれた要素であることが窺える。25・28も27の顔面部や体部文様との類似性から、加曽利B1

式期と考えて良いのではないだろうか。以上のことから、25・27・28は植木の第4段階に継ぐ第5段階とも言うべき位置を付与することが可能である。29は体部文様はやや異なるものの、下端がスカート状に開くプロポーションから30の「内匠タイプ」との関連が把握でき、これと近似した時期が想定される。

筒形土偶の終焉が堀之内2式期ではなく、加曽利B式期にまで下ることについては、栃木県後藤遺跡出土の土偶を分析した上野修一氏が既に指摘しているところであるが、27の例によってもその妥当性を再確認できよう。

ハート形土偶 この土偶については植木・⁽²⁸⁾上野氏らの論考があり、堀之内1式～加曽利B1式期までの変遷が論じられている。両氏の見解には若干の差があるが、31のような顔面表現や集合沈線文主体の体部文様は、堀之内1式期あるいは同2式期最古段階に位置付けている。また、34・35の腰部や36の体部の三角文は、堀之内2式土器の文様と対比されている。これに倣って42・43の背面文様をみれば、42は重菱形文から堀之内2式期に、43が多条沈線の横帯文と「の」字文から加曽利B1式期に各々比定されよう。また、腰部に横位文様が集中し、眼・口部が凹点表現となる37も堀之内2式期に比定されているが、⁽³⁰⁾顔面表現の類似性から時期比定できるならば33・40・41も同期となろう。しかし、こうした顔面表現は堀之内1式土器に伴出した東京都東谷戸遺跡例に既に認められ、必ずしも新段階のメルクマールにはならないようであり、先の33などの時期比定には無理がある。背面に単独の渦巻文を施す38・39は、34や35の背面文様との類似性からすると、堀之内2式期であろうか。

ところで、植木氏はハート形土偶を7タイプに分類し、31を郷原タイプa、37を郷原タイプb、38を島名タイプとしている。⁽³²⁾これらに対比すれば、32は郷原タイプa、34・35は郷原タイプbに⁽³³⁾比定されよう。しかし、島名タイプとされた38については、腹部に顕著な膨らみが認められず、正中線や背面の渦巻文からすれば、むしろ郷原タイプbとすべきではないだろうか。あるいは、体部施文の希薄さや括れのない長胴のプロポーションを重視すれば、39・40と共に別タイプを考えた方が良いのかもしれない。42・43などのプロポーションは、38の系譜上でとらえるとその変遷がスムーズである。また、41は無文であることやその長胴のプロポーション等から、東谷戸遺跡例との系統的な関係も考慮する必要があり、他の土偶とは別タイプとしての特徴を有している。

いずれにしても、31の直接的系譜下にあるものは極めて僅少で、多くはその傍流ともいえるべき特徴を有する新段階のものである。換言するならば、東北地方南部の中心地域のハート形土偶に類似する31の存在そのものが異質であり、本県域は郷原タイプbやハート形土偶の特徴の希薄な一群を中心とした、その周縁の様相を示すものであろう。

板状土偶 44～50の板状土偶の時期も判然としないが、背面文様を先のハート形土偶に対比すれば、44・46・49の単位文化したS字文は35との関係が想定できる。こうしたS字文は、31などの渦巻文に系譜をもちながらもより後出的なものとされているが、⁽³⁴⁾実際に茨城県椎塚貝塚出土の加曽利B1式の注口土器に施文されたS字文に類似することを考慮すると、加曽利B1式期に比

定できるのではないだろうか。また47・48の円文や渦巻文は34・38との関係が想定でき、やはり前者らに近似した段階と思われる。45は連鎖状沈線の横帯文が27の筒形土偶と類似し、これも加曾利B 1式期であろう。これらの板状土偶は、体部文様や顔面造作から見て、ハート形土偶や筒形土偶と密接な関係を有していることが判る。また、時間的にも堀之内2式期や加曾利B 1式期を中心とすることを考慮すれば、ハート形土偶の終末的一様相を留めたものという理解も可能であろう。視点を変えれば、ハート形土偶の板状化傾向という側面も窺える。

51～54の資料は時期判別の手掛かりに乏しいが、51の球状の後頭部や顔面脇に飛び出す耳状の表現は、古い段階の山形土偶にも認められる特徴である。また52の螺旋状の頭頂部は、加曾利B 1式期の25のS字状の頭頂部装飾に一脉通じるところがある。53は脚部の張り出しと僅かながら膨らむ腹部の表現が、堀之内2式新段階のハート形土偶の島名タイプに近似するが、沈線区画の列点文は54との関連性が強い。54は埼玉県赤城遺跡や千葉県新貝塚からの出土資料の中に類例を見出すことができ、森脇 淳氏はこれを加曾利B式期に比定している。円柱状の脚部や横帯文的な文様から見れば、関東地方東部の山形土偶との関連も想定される。おそらく51～54は、山形土偶が成立する時期に近接した加曾利B 1～2式期に該当する土偶ではなかろうか。

山形土偶 山形土偶については、幾つかの論考がなされているが、内容的にそれらを包括した上野氏の論考に詳しい分析がなされている。⁽³⁹⁾ 上野氏は関東地方の山形土偶を福田・椎塚・金洗沢・後藤の4系列に分類し、加曾利B 2式期から曾谷式期までの4段階にわたる変遷を論じている。これに3章での便宜的な分類を対比するならば、体部に縄文を施文するA類(55～57)は福田系列と、列点文や沈線文で文様構成するB・C・D類(60～74・76～80)は後藤系列と、また眼・口部や顎部の表現が隆起手法によるB・C・G類の一部(58・59・73・75・85)は椎塚系列との関係が指摘できる。福田系列のうち、55の三角形の頭部形態は1段階(加曾利B 2式期)の特徴であり、同段階の福島県上岡遺跡や同角間遺跡例とも共通した要素をもつ。⁽⁴⁰⁾ 56は背面を縁どる弧線文から、⁽⁴¹⁾ また57は後頭部の円形貼付と横帯文が千葉県井野長割遺跡出土の曾谷式期の異形台付土器に類似することや顔面を埋める沈線文から、⁽⁴²⁾ 各々4段階(曾谷式後半期)に比定されよう。後藤系列や金洗沢系列のB・C・D類は、横帯文や禪状の区画文、背面の弧線文や渦巻文、それに後頭部の隆帯・沈線・列点によるC字状表現などから見れば、そのほとんどが曾谷式平行の3～4段階であると考えられる。下腹部に椎塚系列の鋸歯状文からの変化と思われる格子目文をもつ70などは、3段階(曾谷式前半期)であろう。

それでは、肩部から腕部にかけて円形貼付文をもつE類や、類似したモチーフを円形刺突文により表出するF類は、どのような位置付けができるのだろうか。このE類については、東京都なすな原遺跡⁽⁴³⁾、長野県新屋遺跡⁽⁴⁴⁾・同中平遺跡⁽⁴⁵⁾、山梨県金生遺跡⁽⁴⁶⁾・同石堂遺跡⁽⁴⁷⁾等の資料に、またF類は同じく金生遺跡の資料中に同一の特徴を有したものを認めることができる。これらの中では、なすな原遺跡例が「堀之内様式後半」⁽⁴⁸⁾、長野県例が加曾利B式後半に比定されているように、⁽⁴⁹⁾ 時間的な位置は確定していない。まずは、この貼付文の系譜を探ることが必要であろう。上野氏は、

金洗沢系列と後藤系列の4段階に、頭部や体部に瘤を貼付した「瘤付土偶」が出現することをとらえ、この土偶が青森県風張(1)遺跡から出土した肩部に瘤を有する十腰内IV式期の屈折像土偶などと関連するとしている。後藤遺跡の「瘤付土偶」には、上腕部に1個の瘤を貼付した後藤系列の資料(第3群第6類)がある。この瘤のあり方はE類よりもC類の66と類似するが、これらと平行対比すればE類も4段階に比定できることになる。また、その簡略タイプとでも言うべきF類も、ほぼ同一の位置付けができればよい。

顕著な特徴のない無文のG類のうち、膝部や頸部背面に瘤状貼付をもつ85・86・90は先の「瘤付土偶」との関連が想定でき、4段階に位置付けられよう。また86には、顔面周縁部と眉の一体化や頭頂部の平坦化のほかに、肩部に接続して弧状に垂れ下がる縦長の乳房が認められる。これに類似した乳房は、埼玉県駒形遺跡例⁽⁵⁰⁾にも見られ、4段階の特徴の1つとすることができそうである。頭部資料⁽⁵¹⁾の83～94は、横位楕円形状や顔面表現の部分的な省略等から4段階前後に比定されられると思われる。93のような滑車形の断面形状をもつものは後藤遺跡例の中にも存在し、やはり新しい様相として位置付けられている。

当地域の山形土偶を総体的にみれば、卓越した後藤系列の存在と僅かな福田・椎塚系列の存在を指摘できる。こうした点は、渡良瀬川・鬼怒川・那珂川の上・中流域の栃木県域とも共通し、言わば北関東的な地域性として把握されるものであろう。しかし、ここで後藤系列との関係でとらえたE類は、縦位多列の円形貼付文、沈線文・列点文の施文の希薄さ、沈線の正中線をもつ等の点で異なっている。さらに、E類に類似する土偶の分布が、関東地方西部や長野・山梨県などの関東山地寄りの地域に偏在する傾向を考慮すると、刺突列点文を多用する後藤系列とは別の系列化ができると考えられ、栃木県域とは異なる様相を示している。また、福田系列や椎塚系列に対比したものの中では、55・56が沈線表現の正中線であり、また55・73は眼・口部が、59は口部が各々凹点表現となる点で、厳密にはそれらの系列と同一ではない。これらは、後藤系列にみられるような山形土偶の地域的展開の中で、変容を遂げたものであろう。

時期的に見れば、1段階は福田系列のみで他の系列は存在せず、3段階は後藤系列、4段階は後藤・金洗沢・福田の各系列が認められるが、2段階の様相が全く不明となっている。これについては、後藤系列としたB～D類の中に、2段階にまで遡るものがあるのか、あるいは福田系列の55などが2段階にまで下り、1段階には53のハート形土偶系や54のようなものが収まるのか、今後更に検討が必要である。⁽⁵²⁾

先に見てきたように、体部に沈線の正中線を有する山形土偶は少数ながらも存在するが、それを隆帯で表現するものはこれまでのところ県内での検出例はない。この表現は関東地方東部から東北地方南部域を中心に認められるようであるが、⁽⁵³⁾その中には95のような正中線と腰部を巡る隆帯が一体化して表現される例は見当たらない。こうしたモチーフは東北地方の瘤付文土器第I・II段階の土偶に存在し、⁽⁵⁴⁾後期後葉段階とされる福島県窪田遺跡例にも認められるものである。前者との関係で平行対比すれば曾谷式～安行1式期とすることができるが、先述の山形土偶に認め

られないことや、体部の幾何学的な文様の存在も加味すれば安行1式期であろうか。

96は平坦な多角形状の頭頂部形態やその上面の対弧文状のモチーフ、側縁の沈線文等が特徴的だが、顔面部の表出法を除けば、千葉県余山貝塚⁽⁵⁶⁾や茨城県思案橋遺跡⁽⁵⁷⁾、同外塚遺跡⁽⁵⁸⁾で出土したミミズク土偶の祖型的なものに類似している。また、頭部の鬚状隆帯は千葉県殿台遺跡例⁽⁵⁹⁾とも共通している。これら各遺跡の土偶はいずれもミミズク土偶が成立する直前段階とされ、安行1式期に位置付けられている。おそらく96も同期に比定して問題ないだろう。余山貝塚例をはじめとした各例は、隆起手法による眼・口部表現を有する点で山形土偶の福田系列に系譜をもつとされ、これらのグループによる系列化も想定されてきている。これに対して凹点手法となる96は、後藤系列の山形土偶にその系譜を求めることができ、前者らとは別の系列化が可能であろう。いずれにしても、ミミズク土偶の成立直前の安行1式期にもこうした地域的様相の継続性を確認できることに注目しておきたい。

ミミズク土偶 97・98のミミズク土偶は、鈴木正博氏により埼玉県真福寺遺跡出土の安行2式期のミミズク形土偶と対比され、これと同段階に位置付けられている。眼・口部の貼付文周囲の有節沈線文や平板的な頭頂部装飾、幅広の縄文施文部と幅狭い横帯文をもつ脚部等に安行2式期の特徴を窺うことができ、98とほぼ同様の99もこれと同段階とみて良いだろう。県内での安行2式期のミミズク土偶は類例に乏しいが、その様相は安行1式期とは異なり、関東地方東部などとも連動した斉一性の強まりを看取できる。

後期土偶の様相を概括すれば、中期後半からのブランクを置いて、他の形式に先駆けて称名寺式期に筒形土偶が出現し、加曾利B1式期まで存続する。ハート形土偶は堀之内1式末期から同2式初頭期に認められるようになるが、その主体はハート形土偶の傍流とも言うべき系統であり、板状土偶とともに堀之内2式をピークとして加曾利B1式期まで残存している。山形土偶は加曾利B2式～曾谷式期に、ミミズク土偶は安行2式期以降に存在するという状況である。しかし、筒形土偶やハート形土偶と山形土偶との交替期の様相はつまびらかではなく、また山形土偶も新しい段階のものを中心とすることから、その成立過程を克明に辿ることはできない。さらに、山形土偶については晩期初頭にまでその系統が存続することを考慮すると、今回は抽出できなかったものの、安行2式段階がミミズク土偶一色ではなく、山形系土偶の存在も想定されるところである。

(4) 晩 期

晩期土偶も土器との明確な共伴関係を有するものはほとんどないが、県内資料の幾つかが先の鈴木・植木の両氏や金子昭彦氏らの論考⁽⁶²⁾中で取り上げられており、ここではそれらを参照しながら各系統の土偶について概観してみよう。

山形土偶系 まず、100～105の山形土偶系であるが、100は頭頂部下に山字状の沈線文が施されている。これは安行2～3a式に平行する八日市新保I・II式土器の波頂部下に認められるモチーフとも類似するもので、これに対比する考え方もある。⁽⁶³⁾しかし、この山字状文を3b式段階の土

版の文様系統に比定する向きもあり、そのいずれなのか判断し難い。⁽⁶⁴⁾後期末葉から晩期初頭にかけて、山形系土偶の眉と鼻の隆帯はハート形やY字状に湾曲化するが、これをミミズク土偶の影響として把握するの⁽⁶⁵⁾と、遮光器形土偶に先行する東北地方の土偶からの影響とみる考え方に⁽⁶⁶⁾分かれる。101などの土偶はその例であろうが、輪郭線に沿った刻文が見られないことや口端への弧状の加飾を考慮すれば、むしろ東北地方との強い関連が窺える。100の例も同様な動向の中での変化と把握できるならば、植木氏の言うように安行3 b 式期の所産であろうか。101～103についても、既述されているところであるが、⁽⁶⁷⁾口部両端の文様や顔面の刻み目等から安行3 a 式期に比定されよう。104は決め手に欠けるが、V字状の頭頂部形態は、千葉県君津原 LOC39遺跡例⁽⁶⁸⁾に見られるような、安行3 b 式期のミミズク土偶の頭頂部装飾に類似しており、基本的にはこうした形状の模倣と考えられる。おそらく、104もそれに近接した時期が想定される。また105は耳栓状の耳部装飾を考慮すれば、やはり101などと同様の段階であろう。

ミミズク土偶 ミミズク土偶の中の106～108に関しては、既に鈴木氏が論じているように、⁽⁶⁹⁾背面の入組文や頭部装飾から107・108が安行3 b 式期に、106は前者とは系統を異にするものの顔面輪郭の刻文の様相から3 a 式期に比定されるものであろう。一方、頭部装飾の異なる109も額部に107と類似した刺突文があり、同期に比定できる。110・111は縄文施文を欠くが、X字状隆帯上の刻み目の存在から、また112は108の脚部文様との類似から各々3 b 式に比定できよう。列点文を多用する頭部装飾の省略化された115は3 c 式期と考えられ、双頭装飾のやや崩れた114も同期であろう。113は「赤城型」ミミズク中空土偶との関係が想定されている。⁽⁷⁰⁾この土偶系統の存続期間⁽⁷¹⁾は、安行3 a 式後半～3 c 式前半か安行3 b～3 c 式⁽⁷²⁾なのか意見の分かれるところだが、113は体部の文様からみて3 b 式の前半期と思われる。

東北系の土偶 116～119のうち、116・118については三叉文や隆帯装飾の特徴から、前者が安行3 b 式期に、⁽⁷³⁾後者が安行3 a 式期に⁽⁷⁴⁾比定されている。117は土版や岩版の文様に類似したS字状入組文が展開するが、文様的には3 b 式期に該当すると考えられる。119は文様的に118と類似し、それと同期に比定されよう。

遮光器系土偶 120～126は、土版に類似した体部文様をもつ120が安行3 c 式期に、⁽⁷⁵⁾截痕列をもつ121が遮光器形土偶との関係から同じく3 c 式前半期に比定されている。⁽⁷⁶⁾124は隆起眼手法や仮面状顔面が120と類似するものの、体部の渦巻き文様はやや後出的であり、3 c 式期後半から3 d 式期に比定されよう。122・123の時期は判然としないが、刺突文の在り方は3 c 式土器に類似し、同期であろうか。125は肩部の隆帯が124と類似することから、また126は三叉入組文のあり方からみて、124ともほぼ同期と考えられる。127の頭頂部の目字状モチーフは、安行3 b・3 c 式に平行する「天神原式」⁽⁷⁷⁾に特徴的なものである。眼部の開孔や頭部の形状が、安行3 d 式期とされる栃木県御霊前遺跡例⁽⁷⁸⁾に似ることを考慮すれば、3 c 式後半期に比定されよう。

I 字文土偶 128～130のI字文土偶は、堀越正行氏により安行3 b～3 d 式末期にかけての5段階の変遷が論じられている。⁽⁷⁹⁾これに従えば、I字文の未完成な128は祖型的な段階として3 c 式

期に、I字文の末端が横位に連結した129・130が新段階(新)の3d式後半期に比定できるだろう。

浮線文系土偶 131・132は、腰部に巡る浮線網状文やそれに類似した沈線文を千網式土器に対比させることができ、同式期に比定して問題ないだろう。

その他の土偶 133～143は特徴に乏しく、明確な時期判別が難しい。134の口部から体部への食道状の貫通孔は、奈良県橿原遺跡のいわゆる「橿原系列」⁽⁸⁰⁾の土偶の中にも認められる。それらは大洞C1式期に比定されているが、これとの対比が可能ならば安行3d式期となろう。135の背面の弧状入組文を囲む菱形モチーフは、安行3b式土器の文様と関係を有すると思われる。136の頭頂部形態は、104の山形系土偶とも共通し、眉・口・耳部周辺の刺突文も含めて、ミミズク土偶との系統関係でとらえれば、104と同様の3b式期であろうか。また、右頬部の円文は105とも共通し、栃木県後藤遺跡の3a式期の土偶⁽⁸¹⁾にも認めることができることを考慮すれば、3a式期にまで遡る可能性もある。138・139は判然としないが、楕円形隆起眼を有する点で晩期初頭段階の106・117や「福田系列」⁽⁸²⁾などと、何らかの系譜関係を有すると思われる。144・145は設楽博巳氏らによって荒海式期に比定されているが、系譜的には千葉県や埼玉・栃木県方面の有髯土偶とは異なり、長野県氷遺跡例との関係が指摘されているところである⁽⁸⁴⁾。

以上、晩期土偶の時間的な位置を概観してみたが、量的に主体を占める安行3a～3d式期をまとめれば次のようになる。大枠でくくれば、①山形土偶系、②ミミズク土偶、③東北系、④遮光器形土偶系、⑤I字文土偶の5系統が存在している。各々の主・客体関係は不明だが、3a～3b式期は①～③を中心とし、①は②と③の系統からの影響が色濃く見られる。②のミミズク土偶は、3b式期の後半にはモチーフを含めた造作の簡略化が著しくなり、3c式期には消滅へ向かうようであるが、その一方で3b式期には中空形式(赤城型)が出現し、新たな動きも認められる。この土偶は、遮光器形土偶の影響下に成立したとされるもので、県内では現在のところ113の明和村矢島遺跡例が唯一である。従来までの分布は、埼玉・茨城・千葉県などのかなり狭い範囲に限定されていたが、少なくとも本県の東部域はその圏内に入っていたことを示している。④の遮光器形土偶系については、3c～3d式期での存在が確認できるが、その様相は遮光器形土偶の直接的な系統ではなく、その「形態受容系列」⁽⁸⁵⁾とされるものである。ただ、120～127は中空・中実の別だけでなく、体部装飾や頭部表現に大きな差異があり、複数の系列に分けられる可能性がある。それは、「天神原式」土器との密接な関係が想定される「目」字状のモチーフをもつ127の存在からも、窺い知ることができる。この遮光器形土偶系と時期的に重複して、3c～3d式期に⑤のI字文土偶が存在する。総数が4点と決して多くはないが、県内での分布は129の赤城村六万遺跡例が示すように、東部域に偏る事なく散在しており、当該期土偶の一角を占めている。

①～⑤以外の系統の存在については、判然としていない。133～143の中には、先の系統以外やそれらの「下位土偶」⁽⁸⁷⁾として把握されるべきものも含まれていると考えられるが、現段階での判別は難しく、もう少し資料の集積が必要な状況にある。

5 お わ り に

群馬県内出土の土偶について、その特徴の記載を主眼としつつ、各研究者の論考を借用して時期や系譜についても概観してみた。内容的には、従来より論及されてきたことの範囲を出るものではなく、むしろ本県の資料により各論考の内容を追認する作業をしたに過ぎないとも言えよう。ただ今回の分析を通じて、県内の土偶の中には後・晩期を中心に既存の系列把握から逸脱するようなものの存在が確認でき、臆げながらも地域的様相の一端を垣間見ることができたように思う。

本稿で扱い得たものは、土偶の基礎的な資料集積にとどまり、その機能・用途をはじめとして縄文呪術体系の中における土偶祭祀の様相解明には遠く及ばないが、本稿が現在進行中の全国的な土偶研究に少しでも寄与できる点があるとすれば幸いである。不十分な点に関しては、今後の研究を通じて補って行きたいと思う。

本稿を草するに当たり、県内資料の収集過程で桐生市教育委員会の伊藤裕介・増田修の両氏、蕨塚本町教育委員会、赤堀町教育委員会の松村一昭氏や松村英子氏からは未発表資料にもかかわらず、多くの土偶の掲載に快諾を頂戴した。各資料の実見や表1の地名表作成に際しては、新井仁・小野和之・木村 収・塩月美智子・清水眞一・新藤 彰・大工原 豊・高橋浩昭・寺内敏郎・長谷川福次・平田貴正・福田義治・古郡正志・前原 豊・三宅敦気の各氏に貴重な時間を割いて頂き、文献の探索では瓦吹堅氏や原田恒弘氏、外山政子氏の手を煩わせた。また、英文要旨の作成にあたっては、Nathun Sturman氏に御指導をいただいた。そして、小林達雄先生や八重樫純樹先生、能登 健氏をはじめ「土偶とその情報」研究会の構成員各位からは、直接・間接につけて多大な御教示を頂いた。文末ながら記して各氏のご厚意に感謝申し上げる次第である。

尚、本研究の一部は、当事業団の平成6年度研究助成を受けて実施したものである。

(1995年9月29日脱稿)

《追記》

脱稿後、鈴木正博氏によるハート形土偶を中心とした後期土偶の論考(1995「土偶インダストリ論」から観た堀之内2式土偶—土偶の編年的位置は土器から、土偶間の動特性は土偶から—)『茨城県考古学協会誌』第7号)の存在を知った。鈴木氏の分析手法は、ハート形土偶の文様を注口土器の文様変化に照応させて、その系統的な理解や時期比定を行ったものである。本稿も含め、従来より漫然と土器文様との対比が行われてきた感のある当該期の土偶研究にとって、この論考には傾聴すべき点が多々ある。筆者らも図3-27や図6-46等の文様を注口土器のそれに対比したが、着想においては一致したものの、その内容は従来の時期比定方法の範疇を一步も出るものではあるまい。鈴木氏の手法に倣って当県の後期土偶を見直せば、郷原遺跡のハート形土偶(図4-31)を初めとして、その多くのものが時間的位置付けの変更を迫られることになる。鈴木氏の提唱する「土偶の編年的位置は土器から、土偶間の動特性は土偶から」という方針に学び、県内の土偶を再考する機会を得たいと思う。

註

- (1)a. 外山和夫 1981 「群馬の土偶」『群馬歴史散歩』47号 群馬歴史散歩の会
 b. 外山和夫 1982 「群馬県における土偶・土版・岩版の集成1」『群馬県立歴史博物館紀要』第3号
- (2) 能登 健 1983 「土偶」『縄文文化の研究』9 雄山閣
- (3) 出土遺跡や総個体数の把握に当たっては、実物あるいは図・写真等で確認できるものに限定した。従って、報告書や市町村誌等にその出土事実が記載されているだけのものは、表1から除外してある。
- (4) 関根慎二 1987 「糸井宮前遺跡II」(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団
- (5) 赤山容造・他 1980・1991・1992 『三原田遺跡』第1・2・3巻 群馬県企業局
- (6) 能登氏は、特異な出土状態を示す代表例として扱われてきた郷原遺跡のハート形土偶についても以下の問題点を上げ、再考の必要性を指摘している。①報告者の山崎義雄が土偶の出土状況について聴取した人物は、道路工事での発見現場を見ていない。②土偶が出土したとされる「石囲み状遺構」は、山崎との対話をもとにした江坂輝弥氏の想像図と考えられる。③江坂氏が共伴資料として紹介した土器は、中期の土器である。これらの点を踏まえれば、郷原遺跡の事例を「土偶の特殊な出土状況」を示すものとして扱うことには、少なからず問題があるだろう。
 能登 健 1992 「群馬県の土偶」『国立歴史民俗博物館研究報告』第37集
 山崎義雄 1954 「群馬県郷原遺跡出土の土偶について」『考古学雑誌』第39巻第3号 日本考古学会
- (7) 山本寿々雄・他 1973 『中谷遺跡』 都留市教育委員会
- (8) 27Aは人面付き土器あるいは単孔土器として、原田昌幸氏や堀越正行氏らにより紹介されている。筆者らがこれを実見した折、調査担当者の伊藤晋祐・増田修両氏から近接した地点より出土した27Bの顔面部資料を拝見させていただいた。27Aの体部上端は欠損しているために27Bとの接合点は無いが、体部上端の横断面の楕円形状の形態と口径が顔面部のそれと一致すること、それに縄文原体や胎土・色調・研磨による精緻な造作等が共通することなどから、これらが同一個体の筒形土偶であると断定するに至った。
 a. 原田昌幸 1995 『日本の美術2 土偶』No345 至文堂
 b. 堀越正行 1995 「祭祀関連遺物」『土偶シンポジウム3 栃木県大会 関東地方後期の土偶—山形土偶の終焉まで—』土偶とその情報研究会
- (9) 金子昭彦 1993 「関東地方の遮光器系土偶—東北地方の遮光器土偶との異同—」『埼玉考古』第30号 埼玉考古学会
- (10) 小野正文 1992 「山梨県の土偶」『国立歴史民俗博物館研究報告』第37集
- (11) 原田昌幸 1995 註8aの文献に同じ。
- (12) 藤沼邦彦 1992 「宮城県の土偶」『国立歴史民俗博物館研究報告』第37集
- (13) 井上義安・他 1991 「諏訪台遺跡」大宮町諏訪台遺跡発掘調査会
- (14) 松本 茂・他 1982 「七郎内C遺跡」『母畑地区遺跡発掘調査報告X』 福島県文化センター
- (15) 東京都埋蔵文化財センター 1990 「資料目録4」
- (16) 安孫子昭二・山崎和巳 1992 「東京都の土偶」『国立歴史民俗博物館研究報告』第37集
- (17) 小松 虔・大久保知巳 1983 「葦原遺跡」『長野県史 考古資料編 全1巻3 主要遺跡(中・南信)』 長野県史編集委員会
- (18) この住居は炉体土器を有するが、この土器が報文の挿図中のどれに該当するのか明記されていない。本稿では出土状況写真との照合を通じて、63頁挿図12の1または2の土器が炉体土器と判断した。
 藺田芳雄 1970 「六、上平(大門)」『菱の郷土史』 菱町郷土史編集委員会
- (19)a. 安孫子昭二 1991 「多摩の土偶」『多摩のあゆみ』第62号 多摩中央信用金庫
 b. 安孫子昭二・山崎和巳 1992 註16の文献に同じ。
- (20) 安孫子昭二 1991 註19aの文献に同じ。
- (21) 赤山容造 1991 『三原田遺跡』第二巻 群馬県企業局
 山口逸弘 1988 「新巻遺跡出土土器について」『群馬県の考古学—10周年記念論集—』 群馬県埋蔵文化財調査事業団
- (22) 松本 茂・他 1982 註14の文献に同じ。
- (23)a. 植木 弘 1990 「土偶の形式と系統について—東日本の後期前半における三形式の土偶をめぐって—」『埼玉考古』第27号
 b. 植木 弘 1995 「筒形土偶の系譜とその周辺」『土偶シンポジウム3 栃木県大会 関東地方後期の土偶—山形土偶の終焉まで—』 土偶とその情報研究会
- (24) 山内清男 1939 『先史土器図譜』第III輯 先史考古学会
- (25) 山内清男 1939 註24の文献に同じ。
- (26) 瓦吹 堅 1985 「常陸の土偶—那珂郡東海村を中心として」『大森信英先生還暦記念論文集 常陸国風土記と考古学』 雄山閣
- (27) 上野修一 1989・1991 「北関東地方における後・晩期土偶の変遷について—栃木県藤岡町後藤遺跡出土土偶を中心として—(上)・(下)」『研究紀要』第6・8号 栃木県立博物館
- (28) 植木 弘 1990 註23aの文献に同じ。
- (29)a. 上野修一 1990 「ハート形土偶」『季刊考古学』30 雄山閣
 b. 上野修一 1995 「ハート形土偶の系譜とその周辺」『土偶シンポジウム3 栃木県大会 関東地方後期の土偶—山形土偶の終焉まで—』 土偶とその情報研究会

偶の終焉まで」 土偶とその情報研究会

- (30) 37は手足に指の表現があり、後期の土偶とすることを疑問視する向きもある。1990年に天神原遺跡を発掘調査した大工原豊氏は、遺構・遺物分布の詳細な分析結果から、当該資料が堀之内式期の土偶であるとの結論を下している。
大工原豊・林 克彦 1994 「4 天神原遺跡」『中野谷地区遺跡群』安中市教育委員会
- (31) 松本太郎 1993 「東京都北区東谷戸遺跡出土の後期土偶」『考古学研究』40-1 考古学研究会
中島広顕 1994 「西ヶ原貝塚II・東谷戸遺跡」北区教育委員会
- (32) 植木 弘 1990 註23aの文献に同じ。
- (33) 植木氏は註23aの文献中で35を板状形式bに分類しているが、本稿では34との形態・文様の相同性から自立形式と認定し、ハート形土偶に含めた。
- (34) 上野修一 1995 註29bの文献に同じ。
- (35) 川上博義 1979 「椎塚貝塚」『茨城県史料 考古資料編 先土器・縄文時代』
- (36) 浜野美代子 1988 「一土偶一」『赤城遺跡』埼玉県埋蔵文化財調査事業団
- (37) 森脇 淳 1995 「飯島コレクションの土偶・土製品」『史館』第26号
- (38) 森脇 淳 1995 註37の文献に同じ。
- (39) 上野修一 1991 註27の文献に同じ。
- (40) 目黒吉明 1953 「上岡遺跡」
- (41) 松崎 真 1990 「角間遺跡」『東北横断自動車道遺跡調査報告 8』福島県文化センター
- (42) 内田儀久 1983 「千葉県佐倉市井野長割遺跡出土の異形台付土器(II)」『奈和』21
- (43) 中山清隆・塚原正典 1984 「土製品」『なすな原遺跡-No 1 地区調査一』なすな原遺跡調査会
- (44) 森嶋 稔・他 1991 「新屋遺跡」上山田町教育委員会
- (45) 馬場保之・他 1994 「中村中平遺跡」飯田市教育委員会
- (46) 新津 健 1989 「金生遺跡」山梨県教育委員会
- (47) 雨宮正樹 1987 「石堂B遺跡」高根町教育委員会
- (48) 安孫子昭二・山崎和巳 1992 註16の文献に同じ。
- (49) 宮下健司 1995 「長野県における縄文時代後期の土偶」『研究紀要』第1号 長野県立歴史館
- (50) 植木 弘・植木智子 1988 「第二の道具」『古代史復元 3 縄文人の道具』講談社
- (51) この弧状の縦長乳房をもつ後期土偶は、山梨県石堂遺跡の土偶の中に見られ、小野正文氏はこれを胸元の逆「の」字状文から加曽利B 1式に比定している(註10文献)。しかし、関東地方の事例と比較した場合、肩部に接続して弧状に垂れ下がる縦長の乳房や腹部の禿状区画文は、埼玉県駒形遺跡例に見られるように4段階の特徴の1つであり、肩部から腕部にかけての刺突文もF類の84と共通している。また頸部背面の突起も、やはり4段階の86に認めることができ、「瘤付土偶」と関連をもつ要素と考えられる。このように、石堂遺跡例は全体的にみれば曾谷式後半期にまで下る特徴を有しており、それは腕端部の外反や短足のプロポーションにも窺える。
- (52) 上野氏によれば、後藤系列は福田・椎塚系列とともに1段階の加曽利B 2式期より出現するとされるが、後藤遺跡の後藤系列の中に1段階の資料はなく、同遺跡第7図47の腕部資料を端部の対弧状の沈線文のみで2段階とするには根拠が弱い。また同じ2段階の第9図93は、縄文施文の横帯文を有する点で、福田系列とすべきではないだろうか。この二つを除けば、他は全て3〜4段階となる(註27文献)。これまで、後藤系列にも顕著な後頭部にC字状隆帯を貼付する山形土偶は、高井東式土器との関係で論じられてきたが、後藤系列の出現はこれに連動した時期の可能性も考えられる。また、上野氏が金洗沢系列とするものは、後藤系列の多くの要素を包含しており、両者の区別が不明確である。体軀形状を重視するよりも、むしろ眼・口部や頸部の隆起表現に着目して、本稿の図7-58・59などを金洗沢系列とした方がより整合性があるのではないだろうか。恐らくこれらは、後藤系列の影響を受けて椎塚系列から派生したものであろう。
- (53) 塚本師也 1995 「渡良瀬川・思川流域の諸様相」『土偶シンポジウム 3 栃木県大会 関東地方後期の土偶—山形土偶の終焉まで—』土偶とその情報研究会
- (54) 手塚 均 1994 「後期後半の東南北半」『土偶シンポジウム 2 秋田大会 東北・北海道の土偶』土偶とその情報研究会
- (55) 浜野三代子 1995 「東南北部の動向」『土偶シンポジウム 3 栃木県大会 関東地方後期の土偶—山形土偶の終焉まで—』土偶とその情報研究会
- (56) 国学院大学考古資料館 1986 『余山貝塚資料図譜』
- (57) 河野辰男 1987 「思案橋遺跡」総和町教育委員会
- (58) 川崎純徳 1985 「VI 土製品および土偶・土版」『外塚遺跡』下館市教育委員会
- (59) 原田昌幸 1984 「成田市殿台遺跡出土の土偶」『奈和』22 奈和同人会
- (60) 上野修一 1991 註27の文献に同じ。
- (61) 鈴木正博 1989 「安行式土偶研究の基礎」『古代』第87号 早稲田大学考古学会
- (62) 金子昭彦 1993 註9の文献に同じ。
- (63) 外山和夫 1982 註1bの文献に同じ。
- (64) 植木 弘 1993 「安行期土偶の研究 その1—山形土偶系統と遮光器土偶系統の展開—」『埼玉考古』第30号
- (65) 新津 健 1993 「山梨県における後晩期土偶」『埼玉考古』第30号 埼玉考古学会

- (66) 植木 弘 1993 註64の文献に同じ。
- (67) 鈴木正博 1989 註61の文献に同じ。
- (68) 山本哲也 1989 「君津地方の土偶」『君津都市文化財センター研究紀要』Ⅲ
- (69) 鈴木正博 1989 註61の文献に同じ。
- (70) 川島正一 1995 『矢島遺跡河川敷部分試掘調査報告書』 邑楽郡明和村教育委員会
- (71) 浜野美代子 1993 「遮光器系土偶の考察(1)」『研究紀要』第10号 埼玉県埋蔵文化財調査事業団
- (72) 植木 弘 1993 註64の文献に同じ。
- (73) 鈴木正博 1989 註61の文献に同じ。
- (74) 金子昭彦 1993 註9の文献に同じ。
- (75) 鈴木正博 1989 註61の文献に同じ。
- (76) 金子昭彦 1993 註9の文献に同じ。
- (77) 林 克彦 1994 「Ⅵ-3 天神原遺跡の縄文後・晩期の土器群について」『中野谷地区遺跡群一本文編一』 安中市教育委員会
- (78) 金子昭彦 1993 註9の文献に同じ。
- (79) 堀越正行 1993 「Ⅰ字文土偶、その系統と分布」『埼玉考古』第30号 埼玉考古学会
- (80) 鈴木正博 1989 註61の文献に同じ。
- (81) 上野修一 1991 註27の文献の第8図92。
- (82) 鈴木正博 1989 註61の文献に同じ。
- (83) 荒巻 実・設楽博巳 1985 「有髷土偶小考」『考古学雑誌』第71巻第1号 日本考古学会
- (84) 鈴木正博 1989 註61の文献に同じ。
- (85) 植木 弘 1993 註64の文献に同じ。
- (86) 鈴木正博 1989 註61の文献に同じ。
- (87) 鈴木正博 1982 「埼玉県高井東遺跡の土偶について」『古代』第72号 早稲田大学考古学会

図版・地名表の引用文献

- 1 小林徳助 1926 「利根郡一部地方の出土品につきて」『上毛及上毛人』第116号 上毛郷土史研究会
- 2 金沢佐平 1929 「吾妻郡より発見の土偶に就いて」『上毛及上毛人』第171号 上毛郷土史研究会
- 3 中谷治字二郎 1929 「吾妻郡名久田村赤坂出土の土偶に就いて」『上毛及上毛人』第142号 上毛郷土史研究会
- 4 群馬県利根郡教育会 1930 『利根郡誌 全』
- 5 田島宗二 1937 「邑楽郡小泉出土の石器時代土偶に就いて」『上毛及上毛人』 上毛郷土史研究会
- 6 鶴淵螢光 1940 「利根郡白澤村出土の珍型土器」『上毛及上毛人』第280号 上毛郷土史研究会
- 7 上毛郷土史研究会 1941 「板倉沼出土の土偶 博物館へ陳列さる」『上毛及上毛人』第291号
- 8 神林淳雄 1943 「筒形土偶に就いて」『人類学雑誌』第58巻第6号
- 9 山崎義男 1949 「群馬県郷原出土土偶について」『考古学雑誌』第39巻第3・4合併号
- 10 藺田芳雄 1954 「千網谷戸」 両毛考古学会
- 11 酒詰仲男 1954 「群馬県神流川流域の遺跡」『人文学』14号
- 12 山崎義雄 1958 「歴史 先史時代」『勢多郡誌』
- 13 江坂輝弥 1960 『土偶』 校倉書房
- 14 群馬県立博物館 1963 『先史時代美術展 目録』
- 15 川合 功 1964 「上野村中越出土の土偶」『こいのす』29号 群馬大学歴史研究部
- 16 野口義麿 1964 「土偶」『日本原始美術2 土偶・装身具』 講談社
- 17 白沢村誌編纂委員会 1964 『白沢村誌』
- 18 梅沢重昭 1965 「安中市中野谷天神原出土の土偶」『群馬県立博物館報』7 群馬県立博物館
- 19 梅沢重昭 1968 「下久保ダム水没地埋蔵文化財発掘調査報告書」 下久保ダム水没地埋蔵文化財調査委員会
- 20 藺田芳雄 1970 「六、上平(大門)」『菱の郷土史』 菱町郷土史編纂委員会
- 21 鬼形芳夫 1973 「高崎市八幡山遺跡出土の土偶」『まえあし』14号 東国古文化研究所
- 22 大沢末男 1974 「第一章 原始から古代へ」『吉井町誌』
- 23 近藤義雄 1975 「(一)縄文式文化時代」『箕郷町誌』 箕郷町誌編纂委員会
- 24 高橋 徹 1975 「遺跡は語る」 喚呼堂
- 25 唐沢定市 1976 「原始古代」『中之条町誌』第一巻
- 26 永峯光一・水野正好編 1977 「日本原始美術大系3 土偶・埴輪」 講談社
- 27 伊藤裕祐・増田 修 1978 「千網谷戸遺跡発掘調査報告」 桐生市教育委員会
- 28 伊藤裕祐・増田 修 1980 「千網谷戸遺跡調査報告」 桐生市教育委員会
- 29 松村一昭 1980 「五目牛洞山遺跡発掘調査概報」 赤堀村教育委員会
- 30 外山和夫 1981 「群馬の土偶」『群馬歴史散歩』47号 群馬歴史散歩の会
- 31 小島純一 1981 「稻荷山K1・安通、洞A3」 粕川村教育委員会

- 32 岡谷英治 1982 『大原道東遺跡発掘調査報告書』 館林市教育委員会
- 33 外山和夫 1982 「群馬県における土偶・土版・岩版の集成1」『群馬県立歴史博物館紀要』 第3号
- 34 前原 豊 1982 「第IV章第7節 谷地遺跡」『C4小野地区遺跡群発掘調査報告書』 藤岡市教育委員会
- 35 能登 健 1983 「土偶」『縄文文化の研究』9 雄山閣
- 36 能登 健 1983 『唐堀遺跡』 吾妻町教育委員会
- 37 松村一昭 1983 「洞山古墳及び北通、鷹巣遺跡発掘調査概報」 赤堀村教育委員会
- 38 茂木由行 1983 『黒熊遺跡群発掘調査報告書(3) 図版編』 吉井町教育委員会
- 39 藤巻幸男 1984 「III-1 縄文時代の遺構と遺物」『小町田遺跡』 群馬県埋蔵文化財調査事業団
- 40 寺内敏郎 1984 「7. 谷地遺跡」『第17回企画展 遺跡は語る』 群馬県立歴史博物館
- 41 藤巻幸男・桜岡正信 1984 「第5章 縄文時代の遺跡分布 図版解説」『新里村の遺跡—遺跡詳細分布調査報告—』 新里村教育委員会
- 42 岡谷英治 1985 『上ノ前遺跡発掘調査報告書』 館林市教育委員会
- 43 伊藤裕祐・増田 修 1985 『千網谷戸遺跡発掘調査概報』 桐生市教育委員会
- 44 新藤 彰 1985 「新井第II地区遺跡群発掘調査概報」 榛東村教育委員会
- 45 能登 健 1985 『郷原遺跡』 吾妻町教育委員会
- 46 若月省吾 1985 『笠懸村誌』上巻 笠懸村誌編集室
- 47 荒巻 実・他 1986 「C11 沖II遺跡」 藤岡市教育委員会
- 48 石井克巳 1987 「狩猟採集と農耕の開始」『子持村誌』上巻
- 49 志村 哲 1987 「国道254号線埋蔵文化財発掘調査報告書—A3山間遺跡—」 藤岡市教育委員会
- 50 半田勝巳 1987 『石之塔遺跡』 藪塚本町教育委員会
- 51 関根慎二 1987 「糸井宮前遺跡II」 群馬県埋蔵文化財調査事業団
- 52 寺内敏郎 1988 「第3章第2節2 遺物」『C7神明北遺跡・C8谷地遺跡』 藤岡市教育委員会
- 53 上野修一 1988 「第23回企画展 祈りの原像」 栃木県立博物館
- 54 内田憲治 1988 「城遺跡」『群馬県史 資料編1』
- 55 関根慎二 1988 「糸井宮前遺跡」『群馬県史 資料編1 原始古代1』
- 56 茂木 努・志村 哲 1988 「藤岡北山遺跡」『群馬県史 資料編1 原始古代1』
- 57 新藤彰・小宮俊久 1988 「下新井遺跡」『群馬県史 資料編1 原始古代1』
- 58 新井嘉男・外山和夫・飯島義雄 1988 「清水遺跡」『群馬県史 資料編1 原始古代1』
- 59 能登 健 1988 『群馬県史 資料編1 原始古代1 口絵』
- 60 下条 正 1988 「深沢遺跡」『群馬県史 資料編1 原始古代1』
- 61 能登 健・藤巻幸男 1988 「布施遺跡」『群馬県史 資料編1 原始古代1』
- 62 山下歳信 1988 「天神遺跡」『群馬県史 資料編1 原始古代1』
- 63 小林敏夫 1988 「北米岡遺跡」『群馬県史 資料編1 原始古代1』
- 64 岡谷英治 1988 「大原道東遺跡」『群馬県史 資料編1 原始古代1』
- 65 茂木由行 1988 「黒熊第5遺跡」『群馬県史 資料編1 原始古代1』
- 66 山口逸弘・丸山公夫 1988 「深沢遺跡・前田原遺跡」 群馬県埋蔵文化財調査事業団
- 67 江坂輝彌 1989 「板倉遺跡 類に八の字文様のある中空土偶」『板倉町史 考古資料編 別巻9』 板倉町史編さん委員会
- 68 外山和夫 1989 「板倉遺跡発掘調査報告」『板倉町史 考古資料編 別巻9』 板倉町史編さん委員会
- 69 金子正人・長島郁子 1990 「羽賀北曲輪遺跡」 前橋市埋蔵文化財発掘調査団
- 70 女屋和志雄 1990 「(3) 表土出土遺物」『下佐野遺跡 I地区・寺前地区(1) 縄文時代・古墳時代編①』 群馬県埋蔵文化財調査事業団
- 71 伊藤裕祐・増田 修 1991 『千網谷戸遺跡発掘調査概報』 桐生市教育委員会
- 72 川嶋正一 1991 「矢島遺跡発掘調査報告書」 明和村教育委員会
- 73 新藤 彰 1991 「茅野遺跡概報」 榛東村教育委員会
- 74 藤巻幸男・他 1991 「第4章 縄文時代の遺構と遺物」『大平台遺跡』 群馬県埋蔵文化財調査事業団
- 75 近江屋成陽 1991 「大道遺跡」『横俵遺跡群II(本文編)』 前橋市埋蔵文化財発掘調査団
- 76 西田健彦 1989 「大道遺跡」『阿弥陀井戸道上・伊勢山・大道・山王・明神山』 群馬県教育委員会
- 77 増田 修・萩原清史 1991 「千網谷戸遺跡'91発掘調査概報」 桐生市教育委員会
- 78 山武考古学研究所 1992 「山武考古学研究所設立二十周年特別展 古代の西毛」
- 79 津金沢吉茂 1993 「第2章 縄文時代」『妙義町誌(上)』 妙義町誌編さん委員会
- 80 三宅敦気 1993 「縄文時代後・晩期のムラ—群馬県月夜野町矢瀬遺跡—」『東国史論』第8号
- 81 新井 仁 1993 「内匠上之宿遺跡」 群馬県埋蔵文化財調査事業団
- 82 藤巻幸男 1993 「五目牛清水田遺跡」 群馬県埋蔵文化財調査事業団
- 83 長谷川福次 1993 「前中後II遺跡」『村内遺跡I』 北橋村教育委員会
- 84 大工原豊・林 克彦・他 1994 「4 天神原遺跡」『中野谷地区遺跡群』 安中市教育委員会

- 85 瓦吹 堅 1994 『特別展 東国の土偶』 茨城県立歴史館
- 86 川嶋正一 1995 『矢島遺跡河川敷部分試掘調査報告書』 明和村教育委員会
- 87 新井 仁 1995 『下高瀬寺山遺跡』 群馬県埋蔵文化財調査事業団
- 88 大賀 健・他 1990 「15. 下鎌田遺跡(本調査)」『山武考古学研究所年報』No. 7
- 89 1992 「20. 五料II遺跡」『山武考古学研究所年報』No. 9

参考文献

- 1 小林達雄 1977 「祈りの形象 土偶」『日本陶磁全集』3 中央公論社
- 2 永峰光一 1977 「呪的形象としての土偶」『日本原始美術大系 土偶・埴輪』講談社
- 3 鈴木正博・鈴木加津子 1979・1981 「取手と先史文化」上・下巻 取手市教育委員会
- 4 鈴木正博 1980 「『曾谷式』研究序説」『古代探叢』
- 5 鈴木正博・鈴木加津子 1982 「安行3b式研究の序—山内清男博士の学説から鈴木公雄氏の新説を批判する—」『土曜考古』56 小林康男 1983 「縄文中期土偶の一姿相—いわゆる河童型土偶について—」『長野県考古学会誌』46
- 7 鷹野光行 1983 「安行の土偶覚書」『歴史公論』第9巻9号
- 8 米田耕之助 1983 「土版」同上
- 9 宮下健司 1983 「縄文土偶の終焉—容器形土偶の周辺—」『信濃』第35巻第8号
- 10 大塚達朗 1983 「縄文時代後期加曾利B式土器の研究(1)」『東京大学文学部考古学研究室研究紀要』2
- 11 原田昌幸 1983 「発生期の土偶について」『奈和』21 奈和同人会
- 12 神村 透 1984 「下伊那性を示す有脚尻張り立像土偶」『中部高地の考古学』III 長野県考古学会
- 13 奥山和久 1984 「中部山岳地帯に於ける縄文中期土偶の基礎的研究」『中部高地の考古学』III 長野県考古学会
- 14 石井 寛 1984 「堀之内2式土器の研究(予察)」『調査研究集録』第5冊 港北ニュータウン埋蔵文化財調査団
- 15 磯前順一 1985 「筒形土偶について」『常総台地』13
- 16 安孫子昭二 1988・1989 「加曾利B様式土器の変遷と年代(上)・(下)」『東京考古』6・7
- 17 津布樂一樹 1989 「益子町御霊前遺跡出土の土偶」『Aesculus』1
- 18 鈴木保彦 1990 「筒形土偶」『季刊考古学』30 雄山閣
- 19 瓦吹 堅 1990 「山形土偶」同上
- 20 山崎和巳 1990 「みみずく土偶」同上
- 21 浜野美代子 1990 「縄文土偶の基礎研究」『古代』第90号 早稲田大学考古学会
- 22 塚本師也 1990 「北関東・南東北における中期前半の土器様相—縄文地に有節沈線を施文する土器群について—」『古代』第89号
- 23 瓦吹 堅 1991 「水戸市金洗沢遺跡の土偶」『茨城県立歴史館報』18
- 24 埼玉県考古学会・土偶とその情報研究会 1992 「シンポジウム 縄文時代後・晩期安行文化—土器型式と土偶型式の出会い—」『埼玉考古』別冊4
- 25 西田泰民 1992 「縄文土瓶」『古代学研究所 研究紀要』第2輯
- 26 寺内隆夫 1992 「浅間山東側からの視線、西側からの視線」『長野県考古学会誌』67
- 27 安孫子昭二 1993 「「高井東様式大波状口縁深鉢」の編年と分布」『東京考古』第11号
- 28 土偶とその情報研究会 1994 『土偶シンポジウム2 秋田大会 東北・北海道の土偶』土偶とその情報研究会
- 29 土偶とその情報研究会 1995 『土偶シンポジウム3 栃木県大会 関東地方後期の土偶—山形土偶の終焉まで—』
- 30 能登 健 1995 「土偶にこめられた縄文人の心」『東アジアの古代文化』84号 大和書房

Summary

Clay Figurines of Gunma Prefecture in the Jomon Period

— Their Changes and Local Features —

by FUJIMAKI Yukio and ISHIZAKA Shigeru

Clay figurines were symbolic artifacts which were used at magical ceremonies in the Jomon period. Their prevalence often differed with time and place in Japan. If we distinguish some types of clay figurines or examine the differences between them, we will be able to better understand the periodization of early society in which magic played an important role. That is the main aim of this paper.

Accordingly, we have tried to analyze the typological classification and systematic relations of clay figurines of present day Gunma Prefecture. The results of our study are as follows:

- 1) Clay figurines appeared in the eastern Kanto District(Central Japan)in the Incipient Jomon period earlier than elsewhere in Japan. In the area of present day Gunma, they first appeared in the Early Jomon period. They have been classified into a few types, which had systematic relations to clay figurines of the same period of the Tohoku(the northeast of Honshu)and Chubu (the center of Honshu) Districts. Clay figurines disappeared for a time at the end of the Early Jomon period in Gunma, as elsewhere in the Kanto District.
- 2) In Gunma Prefecture, a small number of clay figurines existed in the Middle Jomon period. They were styled after those of the Chubu and western Kanto Districts. They disappeared during the end of the Middle Jomon period. In Chubu District, about 3,000 pieces of clay figurines have been excavated up to now, and they account for 30 percent of all clay figurines in Japan. That is, there is a possibility that the structure of the rituals in the area of present day Gunma is different from that of Chubu, which is approximately 100 kilometers to the southwest, separated by mountains and other geographical barriers.
- 3) In the first half of the Late Jomon period, clay figurines of at least three types appeared in the area of present day Gunma. These were styled along lines of those from southern Tohoku District, but they slowly disappeared. In the latter half of the Late Jomon period, new type clay figurines appeared in the present day Gunma area. They were similar to those found in Tohoku, and were made in large numbers. There was a clear line of demarcation between the latter half and the first half of the Late Jomon period.
- 4) In the first half of the Final Jomon period, a few types had systematic relations to clay figurines of the latter half of the Late Jomon period. In addition, there was another type which was copied from Tohoku. In the latter half of the Final Jomon period, there were a few local types and a unique type which had been styled from the eastern Kanto area. At that time, the influence of the Tohoku area's artisans was minimal. In the end of the Final Jomon period, there were only a few clay figurines which had been copied from those of Chubu, and they subsequently went out of use.

As a result, clay figurines found in Gunma Prefecture had systematic relations with those districts, but these systematic relations varied with each stage in the Jomon period. Next time, we will analyze the social background of these local features of the present day Gunma area.

Key Words

Jomon period, clay figurines, magic, early society, systematic relations, Gunma Prefecture, local features, Tohoku District, Chubu District

* Gunma Archaeological Research Foundation 784-2 Shimohakoda Oaza Hokkitsu-mura, Seta-gun Gunma-ken Japan